

Keio
Research
Center
for
the
Liberal
Arts

Annual Report 2024

慶應義塾大学
教養研究センター

2024 年度
活動報告書

2024年度 活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

は じ め に

慶應義塾大学教養研究センター所長 片山杜秀

教養研究戦隊！ つい言い間違えてしまいました。ある日、あるとき、あるところ。年のせいでしょうか。呂律が回らない。慌てて訂正。戦隊でなくてセンターです。教養研究センターでございます。しかし本当に戦隊でなくてセンターなのだろうか。もしかして実はセンターが間違いで戦隊が正解なのではあるまいか。そういう懷疑が頭をかすめました。いやいや、決して冗談ではありません。冗談のつもりだったら、皆さんがもっと面白がってくれそうなことを言おうとします。考えてもみてくださりませ。体育研究所とか、外国語教育センターとか、福澤研究センターとか、アート・センターとか、日本語・日本文化教育センターとか。慶應義塾の組織図を眺めれば、センターや研究所の名前がずらりと並んでいます。ああ、体育だなあ、外国語だなあ、福澤先生だなあ、アートだなあ、日本語だなあ。名称を知れば中身がかなり具体的に見えてくる。組織名とはそのためにあるのでしょうか。経理部とか、人事部とか、総務部とか。分かる、分かる、とても分かる。でも、教養研究センターはどうでしょう？ 教養だよ、教養。日常語だ。分かり易い。それを研究するんだ。なるほどね。でも具体的には？ ちょっと困ります。教養という語は広大過ぎるのです。体育は？ 外国語は？ 福澤先生は？ アートは？ 日本語は？ 教養でないものがありますでしょうか。大学的には、教養課程と専門課程なんて言い方もあったくらいですから、教養は専門と対になる言葉として使われてきた面は確かにございます。でも、文学や経済学や法学や政治学や商学や工学や化学や医学を専門で学ぶといっても、それらが教養と切り離されて存在することはありえないでしょう。教養とはこの世のあらかたを包む概念なのではないでしょうか。森羅万象、みな教養。専門も教養あってこそ。しかも教養には中心がない。文系と理系のどちらかを専門に選ぶということはあるけれど、どちらの方に教養があるなしということはない。教養に貴賤なし。天は教養の上に教養を作らず。教養を研究する中心的機関や場所としてのセンターはありうるが、教養そのものにはセンターも上下も周縁もない。森羅万象がフラットに手を携えて協生して相乗してこそその教養概念なのです。センターよりも戦隊とはそういうことです。戦隊という表現がちょっと物騒なら、プラットフォームでもけっこう。森羅万象を行き交わせ包み込む場所が教養研究戦隊というか教養研究プラットフォーム。そういう場所で当センターはありたい。はっきりしたかたちはない。あくまでつなぐ場所である。海みたいなものかもしれない。広大無辺な感じ。海だからといって何でも持ち込んで放り込んでもらえると思ったら困りますが。現実的な限界はありますので。とにかくこのプラットフォームで 2024 年度に何が起きていたか。本報告書を御覧くださいませ。

目 次

はじめに	3
組織構成と事業計画	6
2024 年度事業報告	7
広報・発信	9

I 研究関連プロジェクト

基盤研究・一般研究・特定研究	11
基盤研究	
教養研究	12
教養連接研究 高大連携プロジェクト	13
教養連接研究 文理連接プロジェクト	14
研究成果公表	
学会・ワークショップ等開催支援	16
＜選書刊行記念企画＞著者と読む教養研究センター選書	17
研究交流	
読書会推進企画「晴読雨読」	18

II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目	
1-1 アカデミック・スキルズ	19
1-2 生命の教養学	20
1-3 身体知	21
1-4 身体知・音楽	22
1-5 日吉学	23
1-6 ゲーム学	24
1-7 エンターテインメントビジネス論	25
2 実験授業	
2-1 庄内セミナー	26
2-2 情報の教養学	27
2-3 金融リテラシー入門	28
2-4 みなさん mirai プロジェクト	29
2-5 大学授業における AI 利用のこれから：人間の言語理解と 生成 AI	30
3 「学び場」プロジェクト	31

III 交流・連携関連プロジェクト

1 日吉行事企画委員会（HAPP）	32
2 日吉キャンパス公開講座	34
3 「創造力とコミュニティ」研究会	36

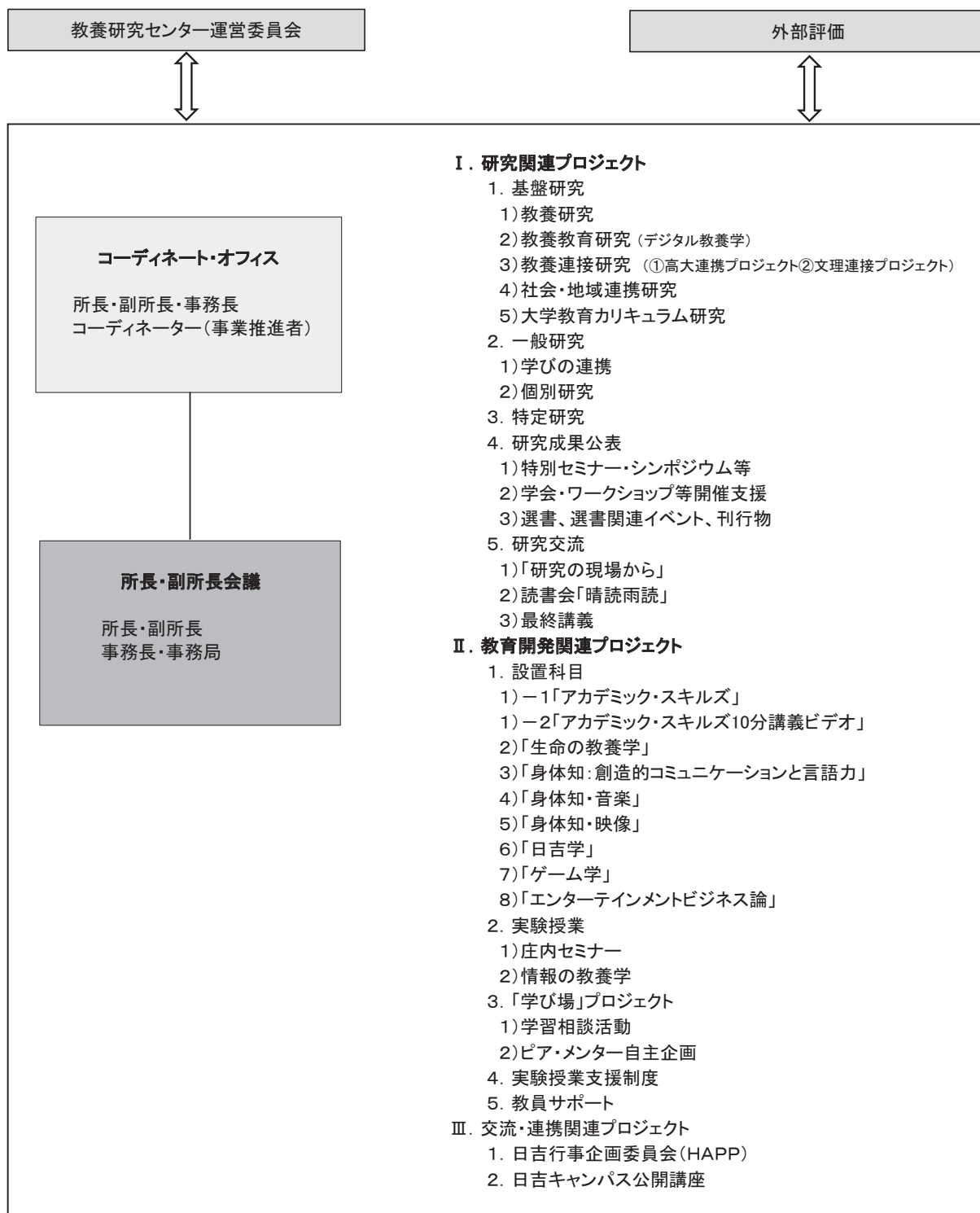
資料編

1	慶應義塾大学教養研究センター規程	38
2	運営委員会委員	40
3	組織構成員	41
4	2024 年度の主な活動記録	43

※本報告書では、各プロジェクトを便宜上3つのカテゴリーのいずれかに分類しました。

※所属・職位は授業、イベント等開催当時のものです。

教養研究センター組織構成と事業計画(2024年度)



コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関です。約20名のコーディネーターから構成されています。所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっています。教職一体での運営というのが教養研究センター設立からの理念ですが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスです。

教養研究センターの事業はきわめて多岐にわたる。当報告書をパラパラとお捲り頂くだけでもその感じは伝わるかと存ずる。そもそも特定分野を掘り下げ展開するための性質を持った組織ではないのである。慶應義塾大学には多くの研究所的組織があるが、それらはたいてい何らかの具体的領域と密接にかかわるように設計されているだろう。それぞれに幅の広さや狭さはあろうし、枝葉の伸びてゆく余地はあろうけれど、一本の幹がしっかりとあるのが普通だろう。一種の閉鎖系になっているよう。領土や縄張りがあるだろう。優先的に関わる対象が比較的はっきりしているのである。

ところが教養研究センターは明らかに開放系だ。縄張りが無い。ないと言っては言い過ぎだとすれば、融通無碍である。幹があって根を下ろしているのとは違う。あちこちへと必要に応じて彷徨う。いろいろなところに蔦を伸ばしてゆく。絡みつく。何をしていれば教養研究センターであるという定めはない。蔦には蔦の自由あり。大学の中で、放っておいたらつながらないもの同士をつなげ、関わらないものを関わらせ、谷間にかずら橋でもいいから橋を架け、現れようのないものを出現させ、教員個人では行いにくいことを行いやすくし、学部単位ではやりにくいことをやりやすくする。そうして個々の教員の行動範囲を押し広げ、見知らぬ教員同士を結び付け、何らかの創意や工夫や創造を生み、新領域を開拓し、開拓地を後に譲ってより豊穡にする算段をし、大学の未来を切り開いてゆく。そのために存在するのが教養研究センターであろう。

センターには、いちおう所長が1人、副所長が4人いる。5人はいろいろなことをする。センターの事業を推進する。が、所長や副所長がセンターの事業の中身を新しくどんどん立案するということは、やろうと思えばできないことはないし、実際に多少はあるけれど、それが主ということはない。所長や副所長は組織の脳の部分を担わないことはないが、むしろより手足や消化器官である。そもそも組織の性格がそのようには作られていない。主体はあくまで所員である。脳は所員だし、消化器官に消化物を送り込んでくるのも所員である。やりたいことをやるのはもちろん誰よりも所員である。所員の所員による所員のための機関。教養研究センターの基本、いや、ほとんどすべてである。

すると、教養研究センターの所員とは何者なの

か。どこから現れ、どこから供されるのか。センターには専従の所員はいない。専任の教員というものは存在しない。そんな人が多少はいてもいいではないか。希望としては過去なくはなかったが、実現したことは今のところ一度もない。では、所員を供給する母集団は何なのか、所員になれる有資格者は誰なのかというと、学部等の専任教員である。その全体である。どこかの専任者が教養研究センターの所員を兼ねる。原則としてそうになっている。ということではもしかして、たとえば学部の専任教員になると自動的に所員となるようにできているのか。そうではない。自動的な仕掛けは一切ない。そんな僭越なことは行われていない。かといって所員を誰かが選んでいるのでもない。入所審査は存在するが、そこで合否判定をするような発想はない。審査はあくまで形式。よほど例外的な事態が伴わない限りはそうである。教養研究センターに入りたい人は専任教員なら誰でも入れる。入りたい人が入るのだ。あくまで自主的な選択である。センターはいちおう日吉キャンパスにあるが、日吉の大学の専任教員に限っているわけでもない。どこでもよい。事実、他のキャンパスの教員にも所員はいる。どこの学部や研究所や学校に限るという制度ももちろんない。たとえば慶應義塾高校の教員にも所員はいる。何しろ教養研究センターである。教養という概念には際限がない。学問の壁もない。生きるのに役立つ知識や知恵やそれらを消化する回路はみな教養の範疇であろう。範疇は無範疇。それこそ教養である。だから教養研究センターには壁もなければ縄張りもない。御陰様で何百人もの所員の方がおられる。それぞれの方に所属する学部や研究所や学校ではやりにくいことをやって頂く。

具体的には、所員の皆さまに、教養研究センターを使ってなさりたいこと、実現したいことを申請していただく。できれば夢はみんな実現したいものだ。しかし、現実には何でもかんでもその通りというわけにはむしろゆかず、予算や人員やお手伝いできる範囲の限界があるので、御希望通りというには程遠い。けれど、それでもやれる範囲で、出来る限りはお助けさせていただく。そのためのセンターということである。より正確に言えば、それだけではない。もっと他にもやっている。教養研究センターは大学の外にも開かれている。外部から寄附を頂戴して授業を行う。これも大事だ。学生や教職員、あ

るいはご両親や塾員のみならず、広く一般市民の方を対象とした講座も開く。教養研究センターは決して大きな組織ではないにもかかわらず、よくぞこれだけ仕事をしているものだと思個人的には思う。繰り返しになるが、予算が特に潤沢というわけでもないし、職員が大勢配置されているわけでもない。さまざまな御希望を携えてセンターに期待をかけてくださる先生方に対して、職員数は絶対的に不足しているのだ。そこらへんは本報告書を、隅々までお読みいただいても見えてこないかもしれない。世の中のこの種のものにはいちばん肝腎なことは書かれていないものだ。古今東西、大抵そうである。本報告書もその点では同類かもしれない。恐れ入ることである。だが教養研究センターの将来を発展性のあるものにしようとするれば、ここがいちばん重要とも言える。なので、とりあえずここに記しておく。

あとは、もう、個々の諸項目を通覧していただければありがたしなのだけれど、本報告書のいちおうのプロットについて簡単に触れさせていただく。

教養研究センターの事業は大枠では3つに分かれており、本報告書の目次だても、基本はそれに従って、項目を並べている。

1番目は研究関連プロジェクト。ここで言う研究はとても広い。教養研究センターというからには広大無辺なる教養の概念を研究しておかねばセンターの名が廃るということで教養を研究してもいる。将来の学問や教育のためのイメージもまた研究している。そういう大風呂敷めいたことばかりでなく、所員個々の研究を手助けし、成果発表につなげるような企ても、その幾らかに関してはこのカテゴリーに入っている。

2番目は教育開発関連プロジェクト。ここはだいたい授業である。教養研究センターは学部の隔てなく広く学生さんに履修してもらえる授業をいくつも開いている。その中には単位の取れる正規の授業も

あれば、まだ実験的なものもある。教養研究センター全体として立案して行われているものもあれば、所員個々の発案や企画やコーディネートにより為されているものもある。教養研究センターの授業は、外部からの寄附によって資金的には成り立つことが原則だから、寄附元をお見つけしたり、そちらと授業の中身をすりあわせたりということも、当然ながら重要な仕事になる。そうやって2024年度も本報告書記載の授業が行われていて、各々の授業にはそれぞれの縁起や由緒があるわけだけれど、ただその全体に共通するのは、既成の学部や他の研究所等には置きにくい、今日の学生の教養の形成のためにはあってよいと考えられる内容を持っているということだ。

3番目は交流・連携関連プロジェクト。どこと交流し連携するのかというと、学内での交流・連携は1番目と2番目のプロジェクトに含まれる建付けになっているので、この3番目の交流と連携の先は学外、塾外ということになる。学校の外にも開かれた催しを行ったり、外に開いていくための知恵を求めて研究したり、というのがこのカテゴリーである。

以上、3分野。その整理の仕方は個々の中身にかなり対応していて、その意味で実質的にも機能している区分ははずだが、踏み込んで考えれば、判然と分類してそれでよしということでは済まない事柄の詰まった報告書ではある。相互に折り重なり連関している諸項目を、便宜上3つに分けさせてもらっている。そのくらいのことである。区分はありはするが、その区分にはめられた個々の内容は区分を超えてさすらっている。身勝手に主張の激しい連中が騒いでいると言えよいか。それが教養研究センターならではのエネルギーというものでもあろう。

(片山杜秀)

教養研究センターでは、様々な活動の広報に努め、センターの意義を常に発信している。講演会や公開講座などはポスター、チラシによって告知するとともに、ウェブページを活用して最新情報を随時発信し、研究・教育活動の周知を行っている。また、活動成果を公開する書籍などの出版にも力を入れている。

1. アカデミック・スキルズ

■『2024年度「アカデミック・スキルズ」学生論文集』

2025年3月31日刊行

センターの看板科目である少人数制授業「アカデミック・スキルズ」では、学期を通じた指導によって学生が論文を完成させる。これを編集し、論文集として2004年度より毎年刊行している。

2. 「文理接続プロジェクト」論集

■文理接続研究会論考集『接続』第2号

2024年4月30日刊行

センターの基盤研究「文理接続プロジェクト」の参加者による論集。6本の論考を収める。

3. 「生命の教養学」講義記録

■『2024年度「生命の教養学」講義記録』

2024年10月30日刊行

オムニバス形式で行われるセンター設置科目「生命の教養学」の講義内容の記録。2024年度のテー

マは「死と再生」で、11名の講師による講義の紹介である。

4. 教養研究センター選書

■原大地『教養研究センター選書 25 「悪の花」の旅——ボードレールを読もう』

2025年5月15日刊行

■金柄徹『教養研究センター選書 26 韓国の若者と徴兵制』

2025年6月14日刊行

センターでは、研究の前線を一般にもわかりやすい形で紹介することを趣旨として、選書を刊行している。原稿は毎年所員から募集し、査読選考を経て刊行を決定している。2024年度は2作が採択され、刊行に至った。

5. 報告書

■『教養研究センター 2023年度活動報告書』

2024年8月31日刊行

6. Newsletter (ニューズレター)

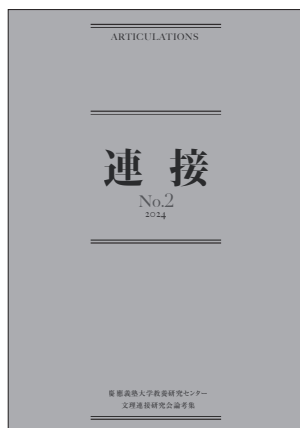
■第44号 2024年5月15日刊行

■第45号 2024年11月29日刊行

教職員とセンター所員を対象とした広報の一環として、Newsletterを年2回刊行し、半年間の活動についてレポートを行い、今後の予定について告知する。巻頭言などのコラムもある。

(高橋宣也)

2024 年度教養研究センター 刊行物一覧



文理連携研究会論考集『連接』
第2号
(2024.4.30 刊行)



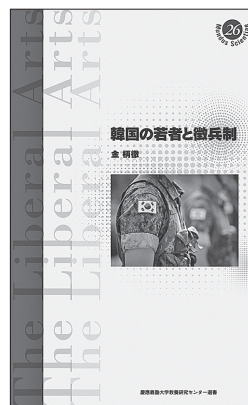
アカデミック・スキルズ2024
学生論文集
(2025.3.31 刊行)



教養研究センター設置科目
「死と再生」
2024 年度 講義記録
(2024.10.30 刊行)



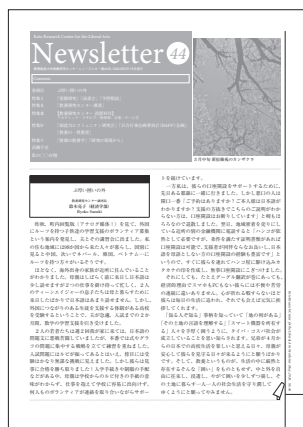
教養研究センター選書
「『悪の花』の旅 ボードレールを読もう」
(2025.5.15 刊行)



教養研究センター選書
「韓国の若者と徴兵制」
(2025.6.14 刊行)



2023 年度活動報告書
(2024.8.31 刊行)



Newsletter44 号
(2024.5.15 刊行)



Newsletter45 号
(2024.11.29 刊行)

基盤研究・一般研究・
特定研究

この項目から数頁分は「研究関連プロジェクト」に分類される諸項目の報告である。「教養研究」はその名の通りで教養を研究している。といっても本報告書でも既に随所で述べた通り教養概念は無際限である。無量大数みたいなものだ。真面目に考えるとなかなか手が見つからない。そこでとりあえずはこのところ、宗教をひとつのテーマにして継続している。「教養連接研究」は次元の相異なる二本柱で。ひとつは大学と高校の活動面での接続。もうひとつは文系と理系の研究・授業面での接続。近未来の教育においてはどちらも抜きに出来ぬと思う。というか抜きにしたらもはや成り立つまい。学会等の開催支援は、これぞ所員の所員による所員のための教養研究センター」の根幹で、センターとして力の限りさせて頂いているつもりだけれど、まだまだ及ばぬことが多かろう。予算と人員のさらなる充実を冀う次第である。選書刊行やそれに関わる催事もまた教

養研究センターの重大使命と心得ている。紙媒体にせよ電子書籍にせよ研究者は本を世に問うてこそ。今後も尽くしてまいりたい。読書会は何企画が並行してもよいもので、主催したい教員が居ればいるほど、学知交流の場が活性化しているものと認識している。他にも触れるべきことは多いのだが、とりわけ特記しておきたいのは、来往舎2階のプロジェクト研究室についてである。改めてこういうところで確認するまでもなく6室あって、教養研究センターの縄張りになっている部屋もある。その使用についてはセンターの事業としては「研究関連プロジェクト」に属するのだが、これは教養研究センターに限らず日吉キャンパス全体の問題として、教室のみならず研究室も飽和してきており、諸研究所と歩調を合わせての様々な見直しが必要となってきた。次年度以降の課題として留意されねばならない。

(片山杜秀)

2024 年度・プロジェクト研究室（204 室・205 室）利用申請一覧

研究代表者	研究テーマ
津田 真弓・経済学部教授	デジタル化時代の古典文学・書誌学の研究と教育
小原 京子・理工学部教授	人間の言語理解と生成 AI：大学授業における生成 AI 利用の可能性を探る
阿久澤武史・慶應義塾高等学校教諭	地域と連携した日吉地区の戦争遺跡の研究と教育的活用

基盤研究 教養研究

教養研究センターでは、「教養」を「宗教」の視点から考えるというコンセプトのもとで、これまでカトリックやプロテスタントなどの研究者を招いて研究講演会を開催してきた。おかげで西洋のキリスト教についての認識は深まったが、東洋の宗教についても講演を行いたいという希望を持っていた。そこに、フランス在住の中国宗教研究者である汲喆(Ji Zhe、ジー・ジャー)氏が折良く来日することを知り、現代中国の宗教事情について講演を依頼したところ、快く引き受けていただいた。そうして企画したのが、2024年7月23日(火)に慶應義塾大学日吉キャンパス大会議室で開催した、第10回教養研究講演会「宗教の中国化」政策——文化的レトリックと統治戦略」である。講演は中国語で行われ、通訳は理工学部の山下が担当した。

汲喆氏は中国出身で、2007年にフランス社会科学高等研究院(EHESS)で博士号を取得し、現在はフランス東洋言語文化学院(INALCO)で教授をつとめている。専門は中国の近現代漢伝仏教で、さらに宗教グローバリズム、宗教社会学理論、フランス中国学などの研究も行っている。著書に“Religion, modernité et temporalité : une sociologie du bouddhisme chan contemporain” (CNRS Editions, 2016)、編著に『二十世紀中国仏教の兩次復興』(Daniela Campo・王啓元との共編、復旦大学出版社、2016)、“Making Saints in Modern China” (co-edited with David Ownby and Vincent Goossaert, Oxford University Press, 2017) などがあり、またデュルケーム『宗教生活の基本形態』、モース『贈与論』、デュルケーム & モース『分類の若干の未開形態について』など、フランス・アナール学派の重要な著作の中国語訳も行っている。

講演は、氏が最近発表した「宗教の中国化」政策

2024年度 慶應義塾大学教養研究センター主催 基盤研究 教養研究講演会 no.10

「宗教の中国化」政策 文化的レトリックと統治戦略

「中国化」は習近平政権における宗教政策の中心的概念であるが、その内容は曖昧かつ複雑で、政治的意味と文化的意味の両方を含んでいる。この政策は、まずは近年における中国政府とキリスト教・イスラム教・チベット仏教などの「外来宗教」の一部の信者との間の緊張関係と、権力側が「民族主義的感情と文化特殊主義的論述を動員して統治戦略の正当化を図ろうとしていることを反映している」と考えられる。

しかし、より長期的な視点に立てば、この政策の目標は中国共産党の支配体制における政治と宗教との関係の基本的な規範を再構築し、宗教問題や民族問題における中央権力の絶対的な権威を再構築することにある。今回の講演では、まず百年來の中国共産党の宗教政策の変遷をふり返ったあと、「宗教の中国化」政策の言説の機能とその内容について考察を行い、さらにこの政策の宣伝と実施についての簡単な説明と評価を行う。

日時: 2024年7月23日(火) 16:30~18:30
場所: 慶應義塾大学日吉キャンパス大会議室
対象: 研究者・塾生・教職員・塾員 ★入場無料・予約不要★
講演言語: 中国語 (日本語通訳有) 司会: 小野 文 (理工学部教授)
通訳: 山下一夫 (理工学部教授)

講演者: 汲喆 (Ji Zhe, ジー・ジャー)

1974年生まれ。フランス東洋言語文化学院(INALCO)教授。2007年にフランス社会科学高等研究院(EHESS)で博士号を取得。専門は近現代漢伝仏教、宗教グローバリズム、宗教社会学理論、フランス中国学。

著書に“Religion, modernité et temporalité: une sociologie du bouddhisme chan contemporain” (仏教・現代性・時間性: 現代における禅宗の社会学)、編著に『二十世紀中国仏教の兩次復興』(二十世紀における中国仏教の二度の復興/Daniela Campo, 王啓元との共編)、“Making Saints in Modern China” (現代中国における成道/David Ownby, Vincent Goossaertとの共編)、“Buddhism after Mao: Negotiations, Continuities, and Reinventions” (ポスト毛沢東時代の仏教: 交渉・継続・再創造/Garrett Fisher, André Lallierとの共編)。“現代中国の宗教政策: 宗教研究の展望”(現代中国の宗教政策: 宗教研究の展望/王啓元との共編)。

またデュルケーム『宗教生活の基本形態』(宗教生活の規範)、モース『贈与論』、デュルケーム & モース『分類の若干の未開形態について』など、フランス・アナール学派の重要な著作の中国語訳も行っている。

お問い合わせ: toiwase-lib@adst.keio.ac.jp

についての論文に内容に沿って行われた。漢伝仏教、チベット仏教、道教、キリスト教、イスラム教など、中国に存在する様々な宗教に対して、この100年間どのような宗教政策が採られてきたかを、様々な資料の分析によって通時的理解を得るとともに、現在行われている「宗教の中国化」政策について様々な角度から共時的分析を行う、というものであった。非常に優れた内容で、筆者も通訳をしながら、「自分があの時にあつた宗教事象を見たのは、こういうことだったのか」といったように、かつて行った調査について納得させられることも多かった。氏の講演によって、聴衆は中国の宗教政策を立体的に捉える視座を得ることができたように思う。

(山下一夫)

基盤研究

教養連接研究

高大連携プロジェクト

教養研究センターにおける高大連携は主に慶應義塾高校との間で行われており、教員間の交流、高校生と大学生が共に学ぶ空間作りが、庄内セミナー、日吉学、高大連携プロジェクト、HAPP 主催による日吉協育ホールでの公演において展開されている。ここでは、日吉協育ホールにおける HAPP 公演について報告し、他の項目についてはそれぞれのセクションを参照されたい。以下の報告は、日吉行事企画委員会（HAPP）に提出された報告書より作成された。担当として、大学側は小菅隼人（理工学部教授）、高校側は古川晴彦（国語科教諭）が主として運営に携わった。

2024 年度は、教養研究センター日吉行事企画委員会主催、アート・センター協力によって、9 月 27 日（金）15:15~17:30 に行われた。この「教養の一貫教育」プロジェクトは、吉増剛造による、新入生歓迎行事日吉協育ホールの柿落とし公演に始まり、各氏とのコラボレーションで続いてきた。吉増氏の健康上の理由により、このシリーズ（2019「後輩たちに語る 一慶應義塾のこと、新作映画「幻を見るひと 京都の吉増剛造」のことなど」、2021「吉増剛造×空間現代 詩と音楽の交差するところ」、2022「吉増剛造×大友良英 詩と音楽の交差するところⅡ」、2023「Voix/Voie 詩と音楽の交差するところⅢ 吉増剛造×檜垣智也×七里圭」）の最後となる 2024 年度は、吉増氏をメインに、高橋世織氏とマリリア氏を迎えて行われた。冒頭、HAPP の委員である小菅隼人の挨拶によって始まり、古川晴彦の司会によって進行した。4 半世紀前に行われていた「早稲田の教室」と現在の「慶應の教



室」とがつながり、時空を超えて往還／同期／螺旋的に回遊する（=Voie）イベントとなった。第 1 部は土方巽の舞踏をめぐる高橋氏と吉増氏の対談が行われ、会場から一貫教育校生をはじめ学部生からも多くの声（=voix）があった。第 2 部はマリリア氏による吉増剛造氏の詩作品を中心としたパフォーマンスとなった。吉増氏は、南三陸の木材を用いた 3・11 の記憶を襲にもつ日吉協育ホールを理解し、応答した一人（いちにん）だった。

吉増剛造氏は 1960 年代から現在まで詩人として常に最先端を疾走し、その創作活動は詩作のみにとどまらず、音楽・美術・映像・舞踏などさまざまな領域と切り結んできた。新入生にとって詩人が発する言葉のひとつひとつはきっと初めて目／耳にする異質な言語であり、今まで用いてきた言語のあり方を再考するきっかけとなった。

会場には 300 名を超える多くの学生が集い、吉増剛造氏による 5 年にわたるシリーズの「卒業」を見届けた。映像記録は、YouTube にて公開されている。

（小菅隼人）

基盤研究

教養連接研究

文理連接プロジェクト

「文理連接プロジェクト」は2019年度に開始し、2020年度から現在まで、1～2か月に1回程度の頻度で、「文理連接研究会」という名の小規模の研究会を継続的に開催している。2020年度と2021年度は「感染」、2022年度と2023年度は「エコロジー」、2024年度と2025年度は「人工」が研究会の共通テーマであり、これらのテーマの下で、様々な分野の研究者たちが、文理の「連接」を意識しながら、それぞれ独自の立場から独自の考察を展開し、共に議論を重ねてきた。

2024年度の文理連接研究会の企画メンバーは、前年度に引き続き、(五十音順に)荒金直人(理工学部／哲学・科学論)、井奥洪二(経済学部／環境科学・医工学)、小菅隼人(理工学部／英文学・演劇学)、寺沢和洋(医学部／放射線物理学・検出器物理学)、見上公一(理工学部／科学技術社会論)、宮本万里(商学部／政治人類学・南アジア地域研究)の6名である。

2022年度以降、この研究会は、年度末に論考集『連接』を作成することを前提に企画されている。「論文」ではなく「論考」としたのは、「論文」という用語が想起させる形式上・方法上の統一性を重視せず、論じること・考察することにおける表現方法の多様性を許容するためである。論考の計画発表、中間発表、最終発表、そして論考集の作成まで、複数の発表と議論を通じて、専門の異なる研究者たちが相互に触れ合いながら、1年を掛けて論考集を完成させる形を採っている。

2024年度は、論考の計画発表に先立って、3回のゲスト講演を企画した。以下が各ゲスト講演とそれに続く研究会の概要である。

【第1回研究会】(2024年5月25日14:00～17:00) ゲスト講演1「人工知能と想像力の拡張：他者の知能から想像力の知能へ」大澤博隆(理工学部／ヒューマンエージェントインタラクション)。【第2回研究会】(7月6日14:00～17:00) ゲスト講演2「AI研究における人工アプローチ」杉浦孔明(理工学部／機械知能・知能ロボティクス)。【第3回研究会】(8月2日10:00～12:00) ゲスト講演3「生命科学・化学にみられる多様な階層の人工細胞」藤原慶(理工学部／人工細胞工学・合成生物学)。(同日13:00～17:00) ワークショップ1「「人工」をテーマとする論考の計画発表」：見上公一、小川愛美(理工学部／スマートウェルネス住宅・建



築システム)、奥田知明(理工学部／環境化学)、寺沢和洋、宮本万里、小菅隼人、荒金直人、西尾宇広(文学部／ドイツ文学)、高山緑(理工学部／心理学・老年学)、荒本文果(理工学部／イタリア・ルネサンス美術史)(以上、発表順。書面による発表を含む。以下同様)。【第4回研究会】(9月28日13:00～19:00) ワークショップ2「論考の中間発表1」：荒金直人、縣由衣子(文学部など／フランス現代思想)、奥田知明、寺沢和洋、井奥洪二、原大地(商学部／フランス文学)、西尾宇広、荒本文果、見上公一。【第5回研究会】(12月14日11:00～18:00) ワークショップ3「論考の中間発表2」：宮本万里、荒金直人、井奥洪二、原大地、石田勝彦(東京化学同人／科学系出版)、荒本文果、見上公一。【第6回研究会】(2025年3月1日10:00～17:00) ワークショップ4「論考の最終発表」：宮本万里、荒金直人、奥田知明、西尾宇広、井奥洪二、原大地、見上公一。

文理連接研究会の専用ウェブサイトには、より詳しい内容が「活動記録」として記されているほか、これまで作成した論考集『連接』第1号、第2号、第3号がダウンロード可能な形で掲載されている(<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/bunri/>)。

この研究会の目的は当初から一貫しており、「文系的な知見や問題関心と理系的な知見や問題関心を、融合するのではなく連接させる」ことであり、

言い換えるならば、文理を問わず、専門を異にする研究者の間で、共通テーマを設定した上で、しかし一つの目標に向かって連携するような共同研究とは異なる仕方で、「接続」を図ることである。この場合の接続とは、具体的には、各々の研究者が自らの関心に基づいて独自の考察を進め、論考を作成する過程で、他の分野の研究者との議論を通じて、間接的にであれ積極的に分野を越えて触発し合うということである。

そのため論考集『接続』は、投稿された完成論文を査読する形を採らず、論考の執筆過程においてなるべく多くの意見交換や議論を行い、その作業を踏まえて各々が考察をまとめたものになっている。分野の異なる専門家たちが専門外の論文を互いに論評し合うような、開かれた学問的連携の形が志向されている。

以下が、最終的に『接続』第3号（2025年4月発行）に掲載された論考の著者と題名である。①井奥洪二「人工骨にみる異分野の接続」、②奥田知明「『永遠の人工物』PFASのリスクコミュニケーション」、③見上公一「『人新世』の可能性：飼育慣らされる「汚れた」キメラとその力」、④寺沢和洋「AI利用とその結果失われるプロセス」、⑤荒金直人「人工物としての客観性」、⑥西尾宇広「『真実らしさ』の所在と行方——18世紀ドイツ語圏における芸術と自然の転倒をめぐる一粗描」。

今回の共通テーマ「人工」は、文理両面からのアプローチが可能な、大きな可能性を秘めたテーマである。本誌所収の6つの論考では、「人工骨」（井奥）や「PFAS」（奥田）という人工物についての文理接続的な考察、「客観性」（荒金）を人工的な

ものとして捉える考察、「データ解析」（寺沢）についての考察を踏まえた人工知能への問題提起、人工／自然の二項対立の曖昧さや逆説に着目した「人新世」（見上）や「真実らしさ」（西尾）についての考察、が展開されている。これ以外にも、論考の完成には至らなかったが、2024年度の一連の研究会では、美術史、文学、人類学、哲学、著作権問題など、様々な観点からのアプローチが試みられた。2025年度も引き続き「人工」が共通テーマとして設定されているので、更なる考察の展開と接続が期待される。

文理接続研究会の過去の共通テーマ（「感染」、「エコロジー」）がそうであったのと同様に、「人工」というテーマもまた、単なる抽象的な概念ではなく、このテーマによって我々は、世界の具体的な現実の前に引き戻されるのであり、このことが、異なる研究分野を繋ぐ土台になっている。分野に拘わらず、全ての研究者は、何らかの仕方で現実を見据えて研究をしているのであり、そもそも接続に意味があり、接続が可能であるのは、最初からこの共通の土台があるからだとも言える。現実を名指す言葉は多様であるが、「人工」という言葉もまた、現実的な諸問題を強く示唆するものであり、それが2024年度に展開された様々な考察を間接的にであれ結び付けている。

2025年度も引き続き「人工」を共通テーマとして、2回のゲスト講演と4回のワークショップを軸に、研究会を継続し、発展させていく予定である。より良い「接続」の場を構築していきたい。（関心のある方はぜひ気軽にご連絡ください。）

（荒金直人）

I 研究関連プロジェクト

研究成果公表
学会・ワークショップ等
開催支援

教養研究センターでは、所員が研究会・ワークショップ等を企画する場合、支援、奨励を行うことで所員の研究・教育の活性化を図っている。
所員による創造的な企画や意欲的な挑戦を奨励し

促進することを趣旨としており、2024年度は春学期8件、秋学期7件の申請が採択された。
(片山杜秀)

2024年度 学会・ワークショップ等開催支援一覧

申請者	会 合 名	開 催 日	参加人数
迫 桂 (経済学部)	Ageing and Literature Symposium	2024年4月13日	塾内 6名 塾外 28名
横山 千晶 (法学部)	The Colour Revolution in Victorian Literature and Art ヴィクトリア朝文学・芸術の色彩革命	2024年4月25日	塾内 20名 塾外 7名
浜田 和範 (法学部)	日本ラテンアメリカ学会 第45回定期大会	2024年5月25日～26日	塾内 25名 塾外 105名
荒木 文果 (理工学部)	講演会&WS「キャンパスにえがく夢：第5校舎跡地の未来」	2024年6月27日	塾内 36名 塾外 0名
新島 進 (経済学部)	日本人形玩具学会 第36回 総会・研究発表大会	2024年6月29日	塾内 1名 塾外 68名
栗原 将人 (理工学部)	Development of Iwasawa theory	2024年7月21日～26日	塾内 13名 塾外 113名
ソッティーレ マルコ (経済学部)	フランス教育学会第42回大会シンポジウム「フランス植民地教育史研究の実態と展望」	2024年9月7日	塾内 10名 塾外 30名
石川 大智 (理工学部)	第25回英詩研究会	2024年9月28日	塾内 10名 塾外 20名
加藤 伸吾 (経済学部)	スペイン史学会大会第45回大会	2024年10月27日	塾内 7名 塾外 48名
村山 光義 (体育研究所)	慶應義塾大学体育研究所・公社) 全国大学体育連合関東支部共催ワークショップ「ルーブリック作成と活用を考えるワークショップ&ディスカッション」	2024年11月9日	塾内 6名 塾外 17名
高山 緑 (理工学部)	第19回日本応用老年学会大会	2024年11月9日～10日	塾内 130名 塾外 340名
近藤 智彦 (文学部)	International Symposium: Receptions of Greek and Roman Antiquity in Japan	2025年1月11日～12日	塾内 5名 塾外 60名
佐藤 元状 (法学部)	Japanese Cinema: What Is It? 国際オンラインシンポジウム	2025年1月13日	塾内 10名 塾外 20名
石川 大智 (理工学部)	第26回英詩研究会	2025年3月2日	塾内 10名 塾外 15名
小原 京子 (理工学部)	第6回 国際フレームネット・ワークショップ 2025 (IFNW 2025)	2025年3月7日～8日	塾内 13名 塾外 36名



研究成果公表

<選書刊行記念企画> 著者と読む教養研究センター選書

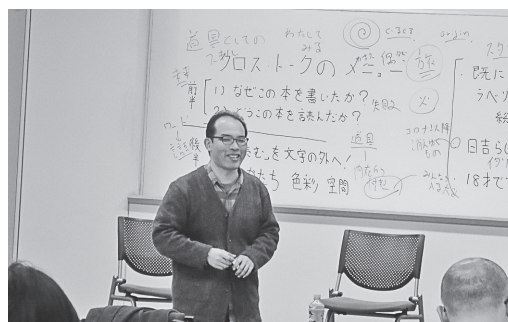
—第4回『文芸共和国の歩き方：書棚を遊歩するためのキーワード集』

○日吉キャンパスから「この本は、一体何のジャンルに入るんだ？」とビックリされる選書を

うまく分類できない書物が大好きだ。例えば、クラフト・エヴィング商會の『ないもの、あります』を開くと、商品として「堪忍袋の緒」や「舌鼓」、「他人のふんどし」がイラスト付きで紹介されている。言葉の表現では存在するが、実際には「ないもの」を集めた当該書は、アイデアの本とも呼べるし、言葉遊びの本とも言えるし、はたまたエッセイ風の日常ファンタジーと形容することもできる。松岡正剛の『フラジャイル：弱さからの出発』も、通信ネットワークの話題から18世紀京都の売茶翁へと話が移り、赤ちゃんの考察から、ラッパーのリズム感覚へと思考が飛翔する。日本文化論の書とも読めるし、文と理の世界を自由に行き交う博物学的エッセイとも表現でき、あるいは身体感覚の伴った哲学理論の巻としても紹介できる。他にも、ヨシタケシンスケの『ヨイヨワネ』など、「圧倒的に面白いが、そのジャンルを形容しがたく、それ以前には類書も中々ない本」というのは、私たちの思考枠組み／分類のフレームそのものを揺さぶってくれる。このユサユサの衝撃は、ショッキングであるが気持ちよい。

『文芸共和国の歩き方：書棚を遊歩するためのキーワード集』を準備する上で、目指したのはそういった「なんとも分類／名状しがたい」本である。『文芸共和国の歩き方』は出版そのものがゴールではなく、これを手に取った読者が、それぞれの知的バックグラウンドの中で「これは〇〇の本である」とどう受け止めていくか、読者の手によって「当該書のジャンル布置」がどう形成されていくのか、これらのプロセスを「日吉という学びの交差点」で共有するところまでが、執筆・出版プロジェクトの一部であった。筆者には想像もつかなかった読み方、遊び方、使い方を発見してもらうことで、「文芸共和国の歩き方」プロジェクトは前に進んでいく。3月14日（金）に実施した「著者と読む教養研究センター選書」イベントも、正しい読み方を解説するのではなく、新しい使い方を一緒に発見する機会、として活用を試みた。

日吉美術研究室とのタイアップによって、青空を



イメージした素敵なポスターができあがり、「今日は本と旅に出る」というキャッチコピーに誘われ、文学部や医学部の1年生たち、法学部の2年生、三田からやって来た文学部の2年生や卒業前の4年生たち、イタリア語や韓国語、中国語といった外国語教育の同僚、歴史学の専任者、退職後の名誉教授など、多様なバックグラウンドをもった参加者が来場し、テキストの中にある「声」をめぐって、賑やかな2時間が過ぎていった。鼎談者を引き受けてくれた荒木文果先生（理工学部・美術）および片山杜秀所長（法学部・歴史）、そして司会として場を見守ってくれた高橋宣也副所長（文学部・英語）に感謝する。

（若澤佑典）

I. 研究関連プロジェクト

研究交流

読書会推進企画「晴読雨読」

「アイデアの系譜学」読書会

日吉キャンパスに創造的混沌を！

テーマと関係する本、エピソード、発想を持ち寄る「アイデアの系譜学」読書会も、二年目を迎えた。荒俣宏『福翁夢中伝』の出版にインスパイアされた「アラマタ的編集遊戯」（4月26日）からスタートし、バラバラをめぐる工学知を起点とした「分解と発酵の思考術」（6月19日）、通信教育課程の夏季スクーリング期間に開催した「かたち学の構想」（8月7日）、藤山記念館のシアタースペース設置を意識した「舞台上で踊る思考」（9月3日）、しっぽ学やきのこ学といった愉快的なネーミングから思考を膨らませた「〇〇学エトセトラ」（11月11日）、感嘆符の示す地平を考える「『ビックリ！』のある思考」（12月7日）、年明けのイベント性を強調した「挨拶の交流圏」（1月14日）に到るまで、計7回のレギュラーイベントを実施した。主に来往舎の小会議室を使用し、概ね10名前後（多いときは20名弱、少ないときは5名前後）の参加者と愉快地に「本を媒介としたお喋りの会」を実施している。

企画者の専攻領域である思想史、あるいは「アイデアの歴史」研究を下敷きにしつつ、タイトルを見ただけでは「どの分野と結びつくか分からない不思議な感じ」、ことばの浮遊感、連想先の複数性を大事にしたネーミングを心がけている。キーワードに惹かれて名誉教授の先生がやってきたり、日吉専任者が様子をのぞきに來たり、参加学生は学部1年生から4年生に到るまで、授業空間では同じ「学びの地平を共有していない」人々が、来往舎の一角に集まってあれこれ喋り、思いもよらぬエネルギーの放出が巻き起こる。普段はなかなか生まれない「接点の探究」である。教員同士の喋っている姿を見せる、という点では特別対談企画「対話！対決！対照！：片山教養研究センター所長と若澤所員が喋り倒す！」（7月5日）が盛況で、2時間以上のイベントにも関わらず、来往舎大会議室がほぼ埋まるほどの賑わいであった。

年明けのレギュラー回については、来往舎1階の

教養研究センター主催 読書会 晴読雨読 アイデアの系譜学 第8回 スペシャル対談企画

対話！対決！対照！
片山教養研究センター所長と若澤所員が喋り倒す！



片山 杜秀 法学部教授
若澤 佑典 文学部助教

2023年6月に始まった「本とアイデアを持ち寄って喋る会」＝アイデアの系譜学読書会ですが、今回で1周年を迎えます。そんなアニバーサリーを祝して、今回は教養研究センターの片山杜秀所長をお招きし、対談形式＝トークショーで実施します。日吉教員の中でもモータレツに喋りまくる二人がそろったとき、どんなトークの化学反応（爆発？）が起きるのか、みなさま、その目撃者となってください。片山所長は新著『大衆必見：わたしの伊藤節郎伝』、若澤所員も新著『文芸共和国の歩き方：書籍を遡歩するためのキーワード集』を持参し、自著を出発点にして文芸の情しさ、日吉という場の魅力、リベラル・アーツの悲喜交々、思想史という営みについて、「喋り倒したい」と思います。

日時：7月5日（金）15:00～17:30（途中入退室可・予約不要）
場所：日吉キャンパス来往舎 2F 大会議室／対象：学生・教職員
※往キャンパス所属の学部・大学職生、一貫校の高校生のみならずも歓迎します！

対談1：日吉という文芸共和国 15:00～16:00
（休憩・歓談） 16:00～16:30
対談2：博覧強記の思想史実践 16:30～17:30

問い合わせ先：tolimase-ib@stud.kaiyo.ac.jp

103・104号教室を使っの読書会開催を試行した。こちらは廊下に面したガラス張りの部屋であるため、通行者の教員・学生が「あれ、何かやってるぞ」と、イベントの雰囲気を外に伝える効果があった。本読書会は回によって、テーマによって、参加者の顔ぶれがかなり変わる。担当者の教え子が同窓会のようにやって来ることになれば、本イベントをきっかけに医学部や総合政策学部の学生さんと交流が生まれることもあった。開催時間に関しても、平日の月曜から金曜まで、一度は休日の土曜も使って、さまざまな午後の時間帯を試して、やってくる人々の多様性を確保しようと努めている。このように場所についても、時間についても、毎回のテーマについても、各回の参加メンバーの背景についても、不定形の「書物をめぐる場」として現在進行形で変化を続けている。

（若澤佑典）

1 設置科目

1-1 アカデミック・スキルズ

[小佐野弾寄附講座]

教養研究センターの設置授業の中では最初期から続く老舗である。2023 年度から小佐野弾さんにご寄附を頂いている。2024 年度は曜日・時限を固定して春・秋学期を通すかたちで3クラスを開講した。例年通りの規模である。春・秋ともに同じ曜日・時限で開いているのは通年での履修を期待してのことだ。本授業は、春学期に4000字、秋学期に8000字の論文を執筆することを、伝統的に課題としてきた。クラスによって担当教員は違う。クラス共通の厳密に定まった論文の書かせ方はない。やり方、導き方は、担当教員にかなり自由に任せられる。目安として決まっているのは各学期の最終提出物の分量だけである。そしてその量は春から秋で倍増する。つまり春の経験を活かして秋に大きく成長することが望まれている。通年履修による積み上げを前提にして、授業がデザインされてきた歴史がある。そのかたちならではの教育成果は間違いなくあり、逸材と呼べる履修者を近年も生み出していると自負するところもある。が、セメスター制の徹底により、通年の履修は時間割的にも学生の履修意識の面からもハードルが上がっている。また、この授業を教養研究センターが開設したおよそふた昔前には、アカデミックなライティングやプレゼンテーションを身につける授業は学部にはあまり設置されていなかったものが、今ではすっかり変わってきている。授業の独自性が保たれなくなっている。要するに転換期なのであろう。この授業も、従来のかたちやこれまでの蓄積を活かしながら、未来の新しいかたちを模索すべき段階が訪れている。そこで2024年度の3クラスのうち、1クラスを、アカデミックなライティングやプレゼンテーションのスキルを磨くよりも、アカデミックな思考法や対話術を促す中身に、実験的に改めてみた。話し合い、語り合いの時間を多く取り、履修者には常に新しいアイデアを着想することが求められた。大学の授業として特異と言えるほどインターラクティブな時空間が創出され、履修者に大きな刺激を与えられたと考える。試行錯誤の時期である。2025 年度も模索を続けたい。

(片山杜秀)



2024年度教養研究センター設置科目

Academic skills

アカデミック・スキルズ

Presentation

プレゼンテーション

Competition

コンペティション

2月6日(木) 14:45~18:00 (予定)

<発表者: 2024年度「アカデミック・スキルズ」クラスⅠ・Ⅱ代表者>

毎週木曜になると、日吉の学生たちが来往舎の一室に集まり、論文執筆に励んでいたのをご存知でしょうか? 慶應義塾大学教養研究センターでは、学部横断的な科目として「アカデミック・スキルズ」を設置し、共に考え、調査を行い、問い、論ずるレッスンを行っています。今回のコンペティション企画では、授業参加者の代表たちが、自らのリサーチ結果を紹介し、オーディエンスの前で大いに論じます。ぜひその成果の日曜者となり、質疑応答や賞の審査に加わってください。

場所: 日吉キャンパス来往舎1F シンポジウムスペース
対象: 塾生・塾員・教職員 ★事前予約不要★

「アカデミック・スキルズ」履修者・関係者でなくとも、研究発表や論文執筆に興味がある方は、誰でも参加できます。2025年度の履修を考えている方には、授業の雰囲気を知るきっかけになるでしょう。ぜひ見学にいらしてください。

主催: 慶應義塾大学教養研究センター お問い合わせ: toiwasa-ik@adst.keio.ac.jp

1 設置科目

1-2 生命の教養学

—死と再生

2024年度のテーマは「死と再生」であった。近代は、戦争や虐殺、災害などによる大量死によって特徴づけられる時代でもあり、「〇〇名死亡」というかたちで数値によって均一化されてしまう「無名の死」は、最も非人間的な出来事だと言える。いっぽうで、大量死の時代の人間は、固有の名を持つ死の重みから逃げ出すかのように、進んで死を生領域から排除してもきた。日常空間から切り離された医療機関でひっそりと迎えられる死や、特定の期間にのみ、形式化された儀礼を通じて想起される死が当たり前になったことは、その証左である。そうしたなかで、敢えて言えば、ある種の「死の魅惑」が機能しているようにも思われる。たとえば東日本大震災のあと、死者の来訪を受けたとする経験が、現地でしばしば語られた。あくまで言説としての意味に注目するなら、死者を（そして失われた生を）鮮やかに想起することが、愛する者とともに自らの一部をも失ってしまった生者にとって、再び生き始めるための力になったのだと考えられないだろうか。そして、大量死の場合に限らず、ひとりひとりの死を引き受けることは、遺された者にとって、再生の導きの糸となるのではないだろうか。私たちの時代は、永遠の生の夢とも結ばれた（まさしく）再生医療への注力や、死なき生命（?）たりうるかもしれないAI開発の試みによって、一見すると、さらに死を生から排除する方向へ向かっている。それは、死に条件づけられたものとしての「再生」の



可能性をも封じることにつながるのだろうか。

今回、このような問題意識のもとで、蛋白質溶液学、医療人類学、中国宗教学、AI研究、表象文化論、イタリア文学、発生生物学、宗教人類学、比較動物学、教育哲学、ドイツ文学・思想という、多彩な分野の専門家に登壇いただいた。詳細は末尾の一覧のとおりである。60分間の講義後の質疑は、講師も運営側も驚くほど熱のこもったものとなり、授業時間のあとも個別に質問者の列ができるほどであった。各分野を代表する研究者たちの知見を全体を通じて総合するという、「死と再生の教養学」の類い稀な機会を得られたことと確信する。なお、本授業の講義記録が教養研究センターHP上で公開されている。以下リンクよりご覧いただければ幸いです。

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/publication/uploadimages/pdf/1732759347.pdf>

(石川 学)

■相分離生物学：タンパク質溶液から生命をイメージする

白木賢太郎（筑波大学数理物質系教授）

■生命のはじまりのポリテクススインドにおける中絶の語りから

松尾瑞穂（国立民族学博物館准教授）

■道教の永生・再生・転生

松本浩一（筑波大学名誉教授）

■体運動習性とはなにか？

新妻雅弘

（慶應義塾大学システムデザイン・マネジメント研究科准教授）

■美術は「死と再生」をどう表現してきたか

香川 檀（武蔵大学名誉教授）

■『神曲』の生と死

村松真理子（東京大学大学院総合文化研究科教授）

■生きるための死と再生

田口瑞姫

（慶應義塾大学文学部助教（有期）（自然科学））

■死と再生のコスモロジー—出羽三山の修験道

鈴木正崇（慶應義塾大学名誉教授）

■「蘇生」論争と自然発生説

鈴木 忠（慶應義塾大学医学部准教授）

■生まれることを問う

樋口大夢

（東洋学園大学グローバル・コミュニケーション学部専任講師）

■語り直されるノアの方舟の物語—20世紀ドイツ語圏の文学を読む

宇和川雄（関西学院大学文学部教授）

1 設置科目

1-3 身体知

—創造的コミュニケーションと言語力

教養研究センター設置科目の「身体知—創造的コミュニケーションと言語力」は、夏の6日間を使っ
ての集中講座である。本講座は文学作品を書かれた
言語のみならず、身体表現や視覚芸術を使って読み
解き、その体験をまた言語表現へと還元していくと
いう新しい教育モデルとして2010年に開講された。
また、通学生が通信教育課程の学生と共に学ぶとい
うユニークな履修者構成も、世代を超えた学びの場
を提供し、豊かな文学解釈と表現体験を可能として
いる。

2024年度は8月12日から17日まで集中で行わ
れた。本年度の授業では、通学生と通信教育部の学
生、計21名を迎え、「再会」をテーマに文学作品を
教材に選んだ。2024年は分断と技術革新が身近に
なった年である。不安定な政情の中で、多様性が謳
われつつも分断が浮き彫りになり、AIなどの技術
革新も身近になった。また、知っていたはずの物事
や他者の中に新たな姿を発見したり、技術や情報の
波の中に押し流されていく自分をもう一度見つめ直
したりと、さまざまな「再会」を経験する年でもあ
り、2024年度のテーマは現在の私たちの立ち位置
を表すものとなった。

教材として取り上げたのは、アフリカ系アメリカ
人の作家、ヴィクター・ラヴァルの『Recognition』、イギリスの作家、マイク・フォックスの『帰巢本能』、そして去年に引き続きアメリカの作家、ジョー・ミノの『囀る高麗鶯だったあの子』の3つの短編である。このテーマをもとに、路上生活者とともに身体表現に挑むダンサー、アオキ裕キ氏を講師にお招きし、作品の読解段階から授業に参加してもらい、そこからそれぞれの文学の解釈に基づ
く身体表現の可能性を受講者とともに探る作業を展

開した。コミュニティ・ダンスのファシリテーター
としても活躍するアオキ氏は毎日、履修者の身体や
精神的な変化にも気を配り、学生たちも安心して授
業に入り込むことができた。

そして今年も授業が進むにつれ、世代を超えて自
由に様々な意見を出し合う環境が整い、声と身体を
使った新たな表現を通してこれらの作品に出会い直
す経験を味わった。唯一例年と異なった点は、金曜
日に台風が関東に到来したために、各自自宅での準
備作業とならざるを得ない事態となったことであ
る。かえってこの時間は、今一度作品を読み返し、
自分の中で翻案を組み立てる有効な「振り返り」と
「創造」の時間となったと思われる。

恒例の最終成果発表会は、アオキ氏の率いるダン
スカンパニー「新人Hソケリッサ!」のメンバーも
加わり、力強いパフォーマンスを展開した。また、
これまでの身体知の履修者が最終発表会に来てくれ
たのみならず、飛び入りで参加するなど、今までの
授業とのつながりも確認する時間となった。特に去
年の教材に使った1作品を今年も使ったので、新旧
の学生たちによる読み解きの違いや演出の違いをも
とにして意見交換が行われたことは、今一つの学び
の場面を提供してくれた。

身体知の授業の派生的な効果は、アーティストに
も影響を与える点であろう。授業での経験が、「新
人Hソケリッサ!」の公演にどのような変化を与え
ていくのかも見守りたい。そして今後も引き続き夏
季集中講座の「身体知」では、アーティストやほか
の学生とのコラボレーションを通じて、言語文化と
身体表現の豊かさを共に探っていく予定である。

(横山千晶)



II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-4 身体知・音楽

教養研究センター設置科目である「身体知・音楽」は、2022 および 2023 年度に引き続き、サポートをお願いできる企業を見つけることができないまま、寄附講座ではない形で2つの授業が開講された。内訳は、器楽クラスである、「古楽器を通じた歴史的音楽実践」と、声楽クラスである「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」であった。どちらの授業においても、履修者数に大きな変化は見られず、結果、例年通りの規模での開講となった。

2024 年度の器楽クラスは、前年度同様、25 人規模のバロック・オーケストラが編成された。古楽器のみを使ったこの規模のオーケストラは非常に珍しく、一般大学だけでなく音楽大学でこのようなことが授業として行われている事例は日本では皆無である。ちなみに、常設のプロの演奏団体すらこのような大きなアンサンブルは、国内では稀である。

器楽クラスの成果発表演奏会は、例年通り2回行われた。第1回となる、室内アンサンブルの演奏会は2年目以降の履修者が中心となって、6月30日に行われた。《バロック後期のドイツ室内楽作品》と題されたこの演奏会のプログラムは、ドイツ人もしくはドイツで活躍した18世紀前期の音楽家たちによる作品で構成された。器楽クラスの参加者全員による古楽オーケストラの演奏会は、フランスバロック後期のオーケストラ作品を中心とした内容で、1月12日に開催された。

声楽クラスにおいては、昨年度同様、少人数のメリットを生かして、きめ細かな指導が行われた。18世紀後期のヴィーンで名を馳せた、モーツァルトとサリエリによるオーケストラによる伴奏が伴う合唱曲2曲をメインとして授業が展開された。成果発表は、上記古楽オーケストラの演奏会の一部として行われた。

2つの演奏会では、YouTube を介したライブ配信を2020年度以降の継続事業として、2024年度も引き続き行った。

(石井 明)

慶應義塾大学教養研究センター・日吉行事委員会 (HAPP) 2024年度企画 日吉音楽院2024 第1回

慶應義塾大学古楽アカデミー・室内アンサンブル演奏会

《バロック後期のドイツ室内楽作品》

Program

アール・フィリップ・アレン (1684-1733)
オーボエ、ヴァイオリン、
通奏低音のためのソナタ
第1楽章 BWV 424

カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ (1710-1758)
フルート、ヴァイオリン、
通奏低音のためのソナタ
イ短調 BWV 1032

ヨハン・フリードリヒ・ブッフホルツ (1733-1795)
フルート、2つのヴィオラ、
通奏低音のためのソナタ
ト長調 BWV 1033

ジョゼフ・アントニオ・フンツァネッリ (1746-1806)
2つのヴァイオリン、
通奏低音のためのソナタ セ短調

アレクサンダー・グイタウ・ダ・モンテ、
通奏低音のためのソナタ
中長調 BWV 427

ヨハン・ゴットフリート・アウグスト (1782-1791)
2つのヴァイオリン、
通奏低音のためのソナタ
イ長調 BWV 433

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ (1685-1758)
フルートとヴィオラ・ダ・ガムバ、
通奏低音のための《新四重奏曲集》より
第6番 中長調 BWV 434

アレクサンダー・グイタウ・
通奏低音のための《新四重奏曲集》より
第6番 中長調 BWV 434

2024年6月30日(日)
14時開演(13時半開場) 入場無料・事前申込不要

出 演：慶應義塾大学・古楽アカデミー・室内アンサンブル(ビデオ実演使用)
石井 明(全曲指揮/チェンバロ・奏者)
場 所：藤原洋記念ホール(慶應義塾大学日吉キャンパス協生館内)
日吉駅(東急東横線・目黒線・新横浜線/横浜駅地下鉄グリーンライン)徒歩1分
主 催：慶應義塾大学教養研究センター・日吉行事委員会 (HAPP) / 慶應義塾大学日吉音楽学研究室
お問合せ：慶應義塾大学日吉音楽学研究室 045-368-1939 <http://www.music.dog.kanagawa.ac.jp/>

Designed by Akari Hirayama (Musicology Office, Keio University)

慶應義塾大学日吉音楽学研究室

2024年度藤原洋記念ホール演奏会シリーズ

全公演入場無料・事前申込不要

December 21, 2024

室内楽・ピアノ
マラソンコンサート

出演：慶應義塾大学音楽部
指揮：石井 明
日時：2024年12月21日(土)
14時開演(13時30分開場)
例年より1時間15分短縮にナクマ
曲目：「シベリウス」などによる
ピアノ・室内楽作品(詳細見込)

January 8, 2025

慶應義塾大学コレgium・
ムジクム・オーケストラ演奏会

出演：慶應義塾大学コレgium・ムジクム・
オーケストラ
全体指揮・指揮：石井 明
日時：2025年1月8日(水)
18時30分開演(18時開場)
曲目：「モーツァルト」「ヴェーバー」
歌劇「オペラ」序曲
ロベール・シューマン
歌劇「ゾラ・ヴェーガ」序曲
ルイ・ジョーゼフ
交響曲第1番 第1楽章 Op. 78

January 12, 2025

慶應義塾大学古楽アカデミー
オーケストラ・小合唱演奏会

出演：慶應義塾大学古楽アカデミー・
小合唱・オーケストラ(ビデオ実演使用)
全体指揮：石井 明 木内麻理子
指揮：石井 明
日時：2025年1月12日(日)
14時開演(13時30分開場)
曲目：「モーツァルト」「ヴェーバー」
《愛の力》組曲 はか

場 所：藤原洋記念ホール(慶應義塾大学日吉キャンパス協生館内)
日吉駅(東急東横線・目黒線・新横浜線/横浜駅地下鉄グリーンライン)徒歩1分
主 催：慶應義塾大学教養研究センター・日吉行事委員会 (HAPP) December 21, 2024
慶應義塾大学音楽学研究室 January 8, 2025 January 12, 2025
お問合せ：慶應義塾大学日吉音楽学研究室 045-368-1939 <http://www.music.dog.kanagawa.ac.jp/>

Designed by Akari Hirayama (Musicology Office, Keio University)

Ⅱ 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-5 日吉学

～発見編 見えないものを見てみよう～

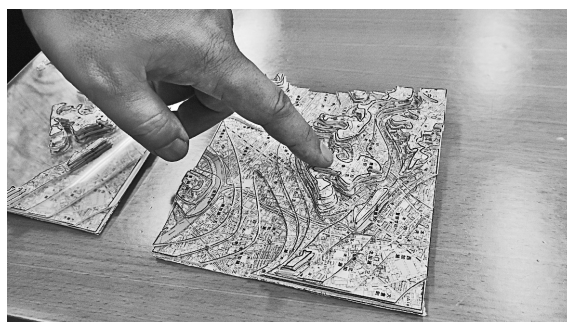
【株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座】

日吉学は、日吉という共通のフィールドのなかで、文理を問わない多様な視点から課題を見つけ出し、グループワークを軸としたアクティブラーニングによってその解決に取り組み、その成果をレポート（4000字）にまとめるというプログラムである。日吉学では、毎年新たなテーマを設定することで、年度ごとに異なる位相から日吉を掘り下げていくことを目指してきたが、2024年度は「発見編 見えないものを見てみよう」と題し、これまでよりも受講生一人ひとりのフィールドでの気づきを重視するプログラムを実践した。

講義は、例年通り、前半をフィールドワークを通じた課題発見の機会とし、後半はアクティブラーニングによるレポート作成の時間に充てるかたちで進めた。

前半では、まず第1回の講義で、フィールドでの課題のを見つけ方とレポート作成の道筋を、過去の日吉学の成果を紹介しつつ解説した。そのうえで、第2回～第7回において、事前学習＋フィールドワーク＋アクティビティからなる、課題発見のためのユニットを3セット行った。フィールドワークでは、教員による解説を必要最低限に留め、歴史、地理、地形、地質、植生などの多様な観点からフィールドに向き合うためのきっかけを提供することで、受講生一人ひとりがさまざまな気づきを得られるようにすることに留意した。また、フィールドワークの度に、そこで得た気づきをめぐりグループで意見交換を行い、その内容をまとめ発表する機会を設けた。

後半は、まず前半のフィールドでの気づきとアクティビティを通して見えてきた課題（レポートのテーマ）を、受講生一人ひとりが言語化するところから始めた。レポート作成にあたっては、テーマの近い受講生同士が意見交換や議論がしやすいように



グループを再編成したうえで、それぞれのテーマに近い専門をもつ教員がそれぞれの主担当となり、その他の教員が適宜アドバイスを行うかたちで指導することにした。これと併行して、テーマ設定の方法や情報検索のスキル、論理的説明の道筋、引用・転載のルールなど、学術的な論文・レポートをまとめるためのノウハウについてのミニ講義も織り込んだ。

2024年度は、一人ひとりのフィールドでの気づきを重視したことで、個々のレポートのテーマは例年以上に多様になった。一方で、日吉の具体的な場所やモノに結びついたテーマが多くなったことで、受講生同士の議論が活発になり、全体としてのレポートのクオリティを高めることにつながったと考えている。

（安藤広道）

1 設置科目

1-6 ゲーム学

[株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座]

「ゲーム学」はデジタルゲームをアカデミックに考察することを目的としたオムニバス形式の講座であり、2022年度秋学期に正規科目として初めて開講され、今年で3回目の開講となった。株式会社コーエーテクモホールディングスの襟川陽一代表取締役社長による熱のこもった特別講義を皮切りに、下記のプログラムが実施された。履修者は前年よりも少なめではあったが、毎回の授業で活発な質疑応答が行われ、リアクションペーパーでも授業の内容と自身の経験を織り交ぜた質の高い回答が数多く見られた。講義の内容は、技術的な側面や文化的な側面は言うに及ばず、経済・政治・哲学などの観点や仕事としてのゲーム産業のあり方など、文理の枠組みを超えた多様な視点からゲームにアプローチするものであった。学期を通じて幾度となく出てきたテーマとして、いわゆるゲーム機からオンラインゲームへのゲームのプラットフォームの遷移があ

り、今後も技術の発展と共に更なる展開が予想される中で、履修生はゲームの未来をどう構築していくのかという問いに向き合うことができたのではないかと思う。講義の中にはゲームという概念をビデオゲームに限定せずに広く捉えたものもあり、その内容がどのようにビデオゲームに当てはまるかを履修生自身が考えることも求められた。私が担当したイントロダクションでは、確かにゲーム学はゲームに関する授業ではあるものの、多くの学生にとって親しみのあるトピックであるゲームに対する多様な視点からの考察に触れることで、自分が求める学術の姿を考える機会にして欲しいというメッセージを履修生に伝えた。多少の戸惑いもあったかもしれないが、だからこそ多くの学生にとってそのような機会になってくれたのではないだろうか。

(見上公一)

■シブサワ・コウのゲーム開発

襟川陽一

(株式会社コーエーテクモホールディングス代表取締役社長)

■コーエーテクモのゲーム開発プロセス

早矢仕洋介

(株式会社コーエーテクモゲームス取締役副社長)

■新しい発想をプロダクト化しやすくするためのゲームエンジンのデザイン

三嶋寛了

(同社執行役員フューチャーテックベース部長)

■ゲーム学：イントロダクション

見上公一 (理工学部准教授)

■リモート社会におけるゲームの新しい役割と可能性

宮本道人 (北海道大学 CoSTEP 特任助教)

■日本のゲーム産業の市場構造

小山友介 (芝浦工業大学システム理工学部教授)

■中国巨大市場への挑戦

大里雄二 (日中エンタメプロデューサー)

■フランスにおけるビデオゲーム

ローベル, ロラン (商学部講師 (非常勤))

■CG 制作のご紹介

野末武志

(株式会社スクウェア・エニックス執行役員 (旧イメージスタジオ部ジェネラル・マネージャー))

■デジタルゲームの感性学

吉田 寛 (東京大学文学部教授)

■ゲームとヒューマンエージェントインタラクション

大澤博隆 (理工学部准教授)

■ゲーム依存について

藤田博史

(医療法人ユーロクリニック理事長・狭山メンタルクリニック院長)

■社会課題解決・コミュニケーション技法としてのシリアスゲーム活用

標葉靖子 (実践女子大学人間社会学部准教授)

■コミュニケーションを拡張するインターバース技術とバーチャルエコノミーの拡大

大隈隆史

(国立研究開発法人産業技術総合研究所人間拡張研究センター総括研究主幹)

■デジタルゲームに見る着せ替え人形的表現

堺 文男

(尚美学園大学総合政策学部非常勤講師)

■脳の学習構造とゲームフィクション

牛場潤一 (理工学部教授)

1 設置科目

1-7 エンターテインメントビジネス論

【株式会社アカツキ寄附講座】

アニメやゲームを始めとしたエンターテインメントビジネスは、法学・経済学・商学・文学・理工学など、多くの学問領域を横断する学際的分野であるが、大学において当該分野を正面から扱っている授業は少ない。しかし大学でこのエンターテインメントビジネスを学び、卒業後に関連の業界でのキャリアを志向する学生は非常に多く、本講座「エンターテインメントビジネス論」は、そうしたニーズに応えるべく、エンターテインメントビジネスについて理論と実務の双方から学際的・分野横断的にアプローチする授業として企画された。

2022年度は全7回の実験授業という位置づけだったが、2023年度以降は正式な設置科目となり、株式会社アカツキ寄附講座として開講された。全体の講師を務めたのは、『キャラクター大国ニッポン 世界を食らう日本IPの力』や『推しエコノミー「仮想一等地」が変えるエンタメの未来』などの著書で知られ、エンターテインメントビジネスの分野では第一線の研究者である、中山淳雄（教養研究センター講師（非常勤）、経済学部訪問研究員）である。実施内容は以下の通り。

【音楽・VTuber】ビジネス講義：中山淳雄

【音楽・VTuber】ゲスト講師との対談：

谷郷元昭（カバー（株）代表取締役社長 CEO）

【アニメ・IP】ビジネス講義：中山淳雄

【アニメ・IP】ゲスト講師との対談：

増田究平（（株）集英社・週刊『少年ジャンプ』
編集部 ONE PIECE メディア担当）

【テレビ・メディア】ビジネス講義：中山淳雄

【ゲーム】ゲスト講師との対談：

杉野行雄（（株）セガ代表取締役社長）

【テレビ・メディア】ゲスト講師との対談：

Keiko Bang（メディアプロデューサー）

【芸 能】ビジネス講義：中山淳雄

【アート】ビジネス講義：中山淳雄

【芸 能】ゲスト講師との対談：

中井秀範（一般社団法人日本音楽事業者協会専
務理事）

【アート】ゲスト講師との対談：

南條史生（美術評論家・キュレーター、エヌ・
アンド・エー株式会社代表取締役）

【映 画】ゲスト講師との対談：

山田兼司（映画・ドラマプロデューサー（東宝
所属））

【まとめ】テスト、サマリー



授業は原則として、各業界についての分析を行う「講義」の回と、それを受けて実際にエンターテインメントビジネスに携わるゲストスピーカーと対談を行う「ゲスト」の回の両方を実施した。こうした設計によって、受講者は「講義」の回で各分野のパースペクティブを得た後、「ゲスト」の回で実際の事例に触れることで当該分野の理解をさらに深めることを企図した。本講座は、中山氏の優れた講義内容に加え、ゲストの顔ぶれも非常に豪華で、極めて満足度の高い授業となった。

（三原龍太郎）

2 実験授業

2-1 庄内セミナー

—中止までの記録

列島全体を苦しめた台風10号により、2024年度庄内セミナー実行委員会は、8月29日から9月1日まで予定していた第13回セミナーの中止を8月27日に決定した。鶴岡市役所をはじめ、予約済だった鶴岡各所の皆様への影響や、慶應側の復路の混乱を回避するためのやむなき判断だった。現地の皆様、ならびに庄内セミナーを楽しみにしていた大学生15名と高校生5名がこの決定を速やかに了承してくれたことを感謝している。

幻に終わった第13回の準備についてここに記す。第13回実行委員会は慶應義塾大学教員5名、慶應義塾高等学校教員2名、教養研究センター事務局2名で構成され1月に打合せを開始した。「庄内に学ぶ生命（いのち）—死と生を繋ぐ」をテーマとし、初日は、慶應義塾大学先端生命科学研究所の荒川和晴所長による、広大なスケールでのいのちの有りを問う講演を設定した。2日目は即身仏の拝観ならびに藩校致道館での庄内論語の素読体験を通して、歴史と伝統の中で「身体」を通して死と生命を繋ぐ営みを知り、夜は庄内セミナーの顔でいらっしゃる郷土文学研究家の東山昭子先生とともに詩人・吉野弘の作品と世界観と庄内の風土を考えることにした。3日目は湯殿山での修験体験を通して白装束で自らの死と再生を経験する1日とし、最終日は「死と生を繋ぐ」4日間の経験をグループで発表する日とした。

委員会は、5月の募集開始を前に小さな1歩を踏み出した。合理的配慮が授業で求められるようになったこともあり、当セミナーでも様々なニーズをもつ学生からの応募にどう備えればよいかを検討し、可能な範囲で対応できるよう宿舎とも相談しつつGoogle Formにも自由記入欄を設けた上で、5月から6月に募集を行った。2024年度は食物アレルギー以外の対応リクエストは無かったが、今後のセミナーでも学生のニーズへの目配りを継続したい。

8月1日の事前説明会では高大の参加者顔合わせができた。また引率教職員は、開催が危ぶまれる事態に備え、審議と連絡の手順マニュアルを整えた。皮肉にもそれが役立った。そしてもともとセミナー開催日の1日前に現地入りを予定していた小菅隼人（理工学部）・鳥海奈都子（慶應義塾高等学校）・富田いづみ（教養研究センター事務局）・鈴木亮子（経済学部）の4名は、進路予想を睨みつつ8月29

慶應義塾大学教養研究センター主催

第13回 庄内セミナー

いのち
庄内に学ぶ「生命」—死と生を繋ぐ—

庄内セミナーは、慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス（TTCK）がある山形県鶴岡市を拠点として開催する生命をテーマにした体験型セミナーです。修験体験、即身仏拝観、庄内論語素読、TTCK先端生命科学研究所バリエーション、講義と対話、地元との交流を通して庄内地方の歴史、文化、自然を体験して「生命」をめぐる幅広い「学び」を体験します。

期間：2024年8月29日（木）～9月1日（日）3泊4日
場所：山形県鶴岡市（鶴岡タウンキャンパス他）
定員：20名程度 対象：慶應義塾大学学部生・大学院生
参加費用：10,000円 ※現地までの交通費は自己負担。現地集合・現地解散です。

■参加申込・募集期間
5月23日（木）～6月20日（木）正午

■参加申込・募集期間
<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/shonai/>

■参加者事前講習会・説明会
8月1日（木）13:00～15:30（予定）
来往各1階シンポジウムスペース

修験体験：羽黒山にて
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp



2023年度庄内セミナーの様子

日（木）の復路便を確保して予定通り現地に赴き、29日に関係各所にお詫びのご挨拶をした。行く先々でご理解と激励のお言葉を頂戴し、現地の皆様への感謝の念を新たにしたい。2025年度は2年分の思いを持って庄内に赴きたい。

（鈴木亮子）

2 実験授業

2-2 情報の教養学

「情報の教養学」は、近年の高度情報化社会の急速な発展における最新の話題を提供することを目的とした講演シリーズである。2024年度は、春学期に4件、秋学期に2件の講演を実施した。

春学期では、まず、高橋直大氏（AtCoder（株）代表取締役社長）が、「今だからこそ学ぶプログラミングとアルゴリズム」という題目で講演した。例を通してアルゴリズムを解説し、何が可能になるのか、また機械学習やAIとのすみ分けについて議論した。次に、福井健策氏（弁護士）は、「人はなぜ、それを未来に残すのか～デジタルアーカイブの夢と、権利、法」という題目で、デジタルアーカイブを取りあげた。アニメ、文庫本、放送台本などの例を通して、国内外の取り組み、著作権から見た許諾・非許諾のアーカイブ活動、そして、日本における政策提言を紹介した。次に、大黒岳彦氏（明治大学教授）は、「情報」という言葉に着目し、「そもそも「情報」って何なんだろう?」という題目で講演した。情報という言葉が、時代と共に変わっていく様子を解説し、近年は意味の欠いた大量のデータから「意味」を見出そうとしていることを紹介した。春学期最後の講演では、伊藤公平塾長が「AI時代の高等教育」という題目で講演した。慶應義塾と米国CMUとのAIのパートナーシップの話、教育においてAIをどのように応用できるか、人口減少が起きる今後において大学教育がどうあるべきかなどについて議論した。

秋学期では、まず、大澤博隆氏（理工学部准教授）が、「情報工学から想像学へ：ヒューマンエージェントインタラクションから物語応用までの系譜」という題目で講演した。ヒューマンエージェントインタラクションや物語（SF）が医療、教育、宇宙開発、ロボットなど様々な方面でプラスに働いてきたことを紹介するとともに、特にSFからは偏見が生まれる危険を指摘した。最後に、北村崇師氏（国立研究開発法人産業技術総合研究所 主任研究員）は、「なぜAIは差別社会を作ってしまうのか? ～問題と防止策について～」という題目で講演した。AIを用いたアプリケーションで起きている差別の例を示し、なぜ差別が起きるのか、どう差別を

今だからこそ学ぶ
プログラミングと
アルゴリズム

AIが機械学習や自然言語処理、コードをAIが生成するようになりつつある時代にあって、アルゴリズムやデータ構造などの基礎知識を身につけておくことは、非常に重要です。

本講演では、AIに何を任せ、何を自分でやるべきか、どう学ぶべきか、電卓や計算機を使わずに頭で考えることの重要性について説明いたします。

事前申込制
https://bit.ly/49qd9Nh

高橋直大 4月17日(水)
16:30~18:00

講師：高橋直大（AtCoder（株）代表取締役社長）
会場：理工学部 303号室
入場料：無料
申込締切：4月10日（木）18:00

人はなぜ、
それを未来に残すのか
デジタルアーカイブの
夢と、権利、法

デジタルアーカイブは、文化遺産、学術資料、歴史的資料などをデジタル形式で保存し、将来にわたってアクセス可能なようにすることです。しかし、デジタルアーカイブには、著作権、肖像権、プライバシー権などの権利問題が生じます。

本講演では、デジタルアーカイブの現状と課題、権利問題の解決策について説明いたします。

事前申込制
https://bit.ly/3TECrir

福井健策 4月24日(水)
16:30~18:00

講師：福井健策（弁護士）
会場：理工学部 303号室
入場料：無料
申込締切：4月17日（土）18:00

そもそも
「情報」って
何なんだろう?

「情報」という言葉は、時代と共に変わってきています。昔は「知らせ」という意味でしたが、今は「データ」という意味で使われることが多くなりました。

本講演では、「情報」という言葉の歴史と、現代における「情報」の意味について説明いたします。

事前申込制
https://bit.ly/4bopPHJ

大黒岳彦 6月19日(水)
16:30~18:00

講師：大黒岳彦（明治大学教授）
会場：理工学部 303号室
入場料：無料
申込締切：6月12日（土）18:00

AI時代の
高等教育

AIの発展により、高等教育のあり方も大きく変わっています。AIを活用した学習や、AIと協働する能力の育成が求められています。

本講演では、AI時代の高等教育のあり方について説明いたします。

事前申込制
https://bit.ly/4bYFpEg

伊藤公平 7月10日(水)
16:30~7:45

講師：伊藤公平（慶應義塾塾長）
会場：理工学部 303号室
入場料：無料
申込締切：7月3日（土）18:00

情報工学から想像学へ：
ヒューマンエージェント
インタラクションから
物語応用までの系譜

ヒューマンエージェントインタラクション（HEI）は、人間と人工知能（AI）が互いに理解し合えるように設計されたシステムのことです。HEIは、医療、教育、エンタメなどの様々な分野で応用されています。

本講演では、HEIの歴史と、最新の応用について説明いたします。

事前申込制
https://bit.ly/4en2LVX

大澤博隆 10月16日(水)
16:30~18:00

講師：大澤博隆（理工学部准教授）
会場：理工学部 303号室
入場料：無料
申込締切：10月9日（土）18:00

なぜAIは
差別社会を
作ってしまうのか？
～問題と防止策について～

AIの発展により、社会に差別が生じる可能性があります。例えば、AIによる雇用選定や融資審査などで、特定の属性の人々が不利になる可能性があります。

本講演では、AIによる差別の問題と、それを防止するための策について説明いたします。

事前申込制
https://bit.ly/4en2LVX

北村崇師 12月18日(水)
16:30~18:00

講師：北村崇師（国立研究開発法人産業技術総合研究所 主任研究員）
会場：理工学部 303号室
入場料：無料
申込締切：12月11日（土）18:00

検知するかを解説した。差別をなくすことの難しさも議論した。

いずれの講演も参加者は興味深く聴講し、質疑も活発だった。春・秋の講演の一部の動画は、下記の情報の教養学のホームページから視聴できる。

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/information/>

（高田眞吾）

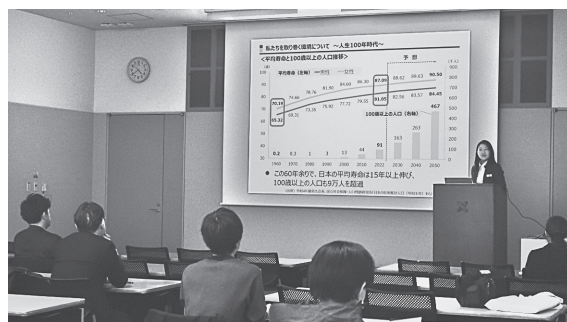
2 実験授業

2-3 金融リテラシー入門

教養研究センター設置科目「金融リテラシー入門」をSMBCグループ寄附講座として、2025年度秋学期の月曜5限に開講することが決定している。2024年度はその開講に先駆けて、4回の実験授業を日吉キャンパス来往舎1階のシンポジウムスペースにて実施した。教養研究センターが各回の司会進行を務め、授業についてはSMBCグループ企業の社員が実施した。4回の各日程・内容は以下の通りである。

- 11月29日「ライフプランを設計する」
 12月2日「金融商品・サービスを活用する」
 12月6日「金融トラブルを回避する、リスクに備える」
 12月9日「資産形成・資産運用の基礎を身に着ける」

各回とも様々な学部の学生20～40名程が受講し、おそらく個人的な内容の質問も絡むことから、全体の時間での質問よりも、終了後に講師に個別に質問する多くの学生の姿が見られた。アンケート結果から、どの回もほぼ90%以上の受講者から満足との



回答を得ることができた。

2025年度のシラバスにも記述しているが、年金受給だけでは老後の備えが十分でないことが明確になっている昨今、更に人生100年を想定すると、現状において、65歳で定年を迎える大半の企業労働者にとっては、定年後の人生が35年もあることになり、それは、大卒から定年まで（43年）とさほど変わらない時間の長さに相当する。そのような状況の中、金融リテラシーは、どのような生き方をしたいのか、いつまで働くのか、会社人・組織人として生きるのか個人で立ち振る舞って生きるのか或いはその両方か、という問いにも直結し、給与所得者としての収入の得方以外についても考える必要がある。分散投資の「分散」は収入の得方、会社や組織とのかわり方、人付き合いにも当てはまる。

可能な限り取り得る可能性について広範囲に渡って展開し、知らないがために損をしていることも多い様々なマナーリテラシーにまつわる情報の存在を知った上で、学生自身の興味・関心に応じて自ら調べ動けるようにすることを目標としている。2025年秋学期に多くの学生からの受講が期待される。

(寺沢和洋)

教養研究センター実験授業

金融リテラシー入門

お金のことを学んでみませんか。人間万事金の世の中。明治の初めの歌舞伎のタイトルです。福澤諭吉先生が蘭語訳塾を学校として軌道に乗せようと奮闘していた頃、世の中ではそんな芝居が流行っていました。福澤先生の学問もメインは経済学だったと書えましょう。国家も組織も家族も個人も、それぞれの財布を十全に使えるにはそれなりに、一歩が独立するとはお金の心配がなくなることなのだ。福澤先生は口を揃って塾生に教えていたのです。それから四十年。世界は万事、ますます金の世の中！お金のことを知らねばなりません。大学でももっと教えるては！その道のエキスパートに聞こう。お待ちしています！

プログラムと日程

第1回 11月29日(金) 5限	第2回 12月2日(月) 5限	第3回 12月6日(金) 5限	第4回 12月9日(月) 5限
テーマ：ライフプラン設計入門	テーマ：金融商品・サービス活用入門	テーマ：金融トラブル回避入門	テーマ：資産形成・資産運用入門
講師名：寺沢和洋 所属：経済学・経済情報学 三田経済大学・経済学	講師名：田村 隆一 所属：経済学・経済情報学 三田経済大学・経済学	講師名：田村 隆一 所属：経済学・経済情報学 三田経済大学・経済学	講師名：田村 隆一 所属：経済学・経済情報学 三田経済大学・経済学

申し込み方法・その他

申込期間：2024年11月9日(金)～11月29日(金) 午前9時00分開始
 会場：来往舎1階 ランタウムスペース 定員：各回100名 定員に達した場合は抽選となります
 ※各回のQRコードは後述の申し込みフォームから申し込みください(※各回別紙参照)。
 ※1回でも申し込みはできますが、4回全て受講することを推奨します。4回受講する場合でも、各回に申し込みしてください。

お問い合わせ先 教養研究センター E-mail: toiwasewa-rib@adst.keio.ac.jp

2 実験授業

2-4 みなさん mirai プロジェクト

教養研究センターを拠点に、慶應義塾未来先導基金・南三陸プロジェクト「自然の中で考える生命、社会の未来—我々は何ができるのか—」の活動（2年目）。本プロジェクトは東日本大震災を経験した南三陸町にある慶應最大の学校林をベースに、キャンパスにいてはできない学びをする場を目指している。本年度は2024年正月の能登半島地震を踏まえ、自然災害を自分事として考える機会を増やした。結果、森林と防災というテーマは密接に結びつき、命、生きるということ、そして我々の未来をどう作るべきかを、参加者に問いかけることになった。

具体的な活動は、合宿のほか、学生による合宿行程作成、南三陸の間伐材を使った慶應公式グッズの試作、日吉キャンパスの2011年3月11日に関する聞き取りインタビュー（黒田修生氏）、日吉の森の整備ボランティア、連合三田会における塾員との交流など。詳細は「活動報告2024」にまとめた。

◇メンバー教員：

岡田英史（理工学部・常任理事）、奥田暁代（法学部・常任理事）、青木淳一（法学部）、井奥洪二（経済学部）、植田浩史（経済学部）、大平哲（経済学部）、糟谷大河（経済学部）、津田眞弓（経済学部）、戸部真澄（法学部）、丹羽雄一（経済学部）

◇学生メンバー：10名

◇主な活動内容：

■5月13日（月）18：15～20：00 シンポジウム
①

題目：「南三陸発！慶應の森からひもとく生物多様性」。ゲストスピーカー：一ノ瀬友博氏（環境情報学部 学部長）、鈴木卓也氏（南三陸地域イヌワシ生息環境再生プロジェクト協議会 会長）

■5月28日（火）18：15～20：00 シンポジウム
②

題目：「今、地震がおきたら？—キャンパスで考える防災—」。ゲストスピーカー：井奥洪二氏（経済学部 教授）、山内明美氏（宮城教育大学 准教授）

■8月8日（火）11：00～16：00 合宿事前学習会
題目：「カードゲームで学ぼう！SDGs」。講師：塚原沙智子氏（環境省）

■9月11日（水）～13日（金）南三陸合宿研修
学生が調査・プランを立てた研修先を見学。

■12月9日（月）18：15～20：00 基調講演＋活動



報告会

慶應義塾・協生環境推進ウィークのイベントの一つ。学校林で活動した塾生会議のプロジェクト（#4）メンバーと共に活動報告をした。

基調講演題目：「〈みんなの森〉の復権へ」。ゲストスピーカー：齋藤暖生氏（東京大学大学院農学生命科学研究科 附属演習林樹芸研究所長）

◇WEB サイト：

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/minasanmirai/>

◇活動報告書：

https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/minasanmirai/PDF/activity_report_2024.pdf

（津田眞弓）

2 実験授業

2-5 大学授業における AI 利用のこれから：人間の言語理解と生成 AI

「人間の言語理解のプロセスと生成 AI の仕組みを知って、生成 AI に冷静に向き合おう！」と言う主旨で、2024 年度秋学期に GIC センター科目・理工学部総合教育セミナー「大学の授業における AI 活用の探求」を開講した。本実験授業では、上記科目の授業報告を兼ね、対象を教員に広げ、生成 AI に関する疑問や意見を共有する場とした。

<開催日> 2025 年 3 月 26 日

<内 容>

- 1) 2024 年度秋学期 GIC センター科目・理工学部総合教育セミナー「大学の授業における AI 活用の探求」授業報告
- 2) ミニレクチャー「怖くない生成 AI」
- 3) ディスカッション「授業での生成 AI の活用について」

<講 師>

小原京子（理工学部 外国語・総合教育教室）
鈴木久美（国立情報学研究所 大規模言語モデル研究開発センター）

<ディスカッサント>

小尾晋之介（理工学部 機械工学科）
ディル・ジョナサン（理工学部 外国語・総合教育教室）

<参加者>

17 名（うち学生 2 名）

新年度直前にもかかわらず、塾内外の方々が参加してくださった。学生の参加は 2 名であったが、「学ぶとは」について考える機会を得たとのことである。特に、教員らの「生成 AI 時代の教育の本質とは、インプット・アウトプットよりも中間の思考プロセスを組み立てることや、謙虚に自らの無知を自覚することである」という指摘に感銘を受けたとの感想を寄せてくれた。

他には、教員各自の授業での AI の位置付けや「生成 AI が身近になる中で如何に学習成果を実質的に保証するか」についても密度の濃い意見交換があった。普段は教員同士がお互いの授業について

人間の言語理解と生成 AI

教養研究センター実験授業

大学授業における AI 利用のこれから

2024 年度秋 GIC センター科目・理工学部総合教育セミナー「大学の授業における AI 活用の探求」では、塾生たちと生成 AI との付き合い方を考え、議論しました。

この実験授業では、対象を教員のみならず広げ、3 部構成のプログラム、

- ①「大学の授業における AI 活用の探求」授業報告
- ②ミニレクチャー「怖くない生成 AI」
- ③ディスカッション「授業での生成 AI の使用について」

を通して、生成 AI に関して普段話さず機会のない疑問や不安を共有・議論する場を作ります。

2025 03/26 15:00 - 17:00

日吉キャンパス 来往舎 2F 中会議室 無料 事前申込不要

講師 小原京子 慶應義塾大学理工学部 外国語・総合教育教室 鈴木久美 国立情報学研究所 特任教授

ディスカッサント 小尾晋之介 慶應義塾大学理工学部 機械工学科 ジョナサン・ディル 慶應義塾大学理工学部 外国語・総合教育教室

主に関心のある教職員・塾生・一般の方

お問い合わせ 理工学部 小原京子 akurag@shri.jp
後援 慶應義塾大学教養研究センター

語ったり特定のトピックについて情報交換したりする機会はあまりないが、今回は議論しながら互いに学んでいくという点で貴重な Faculty Development (FD) の場となった。

事後アンケートから、生成 AI 時代の大学教育について意見交換の機会を求めている教員がいることが明らかとなった。ただし、「生成 AI 時代における学習成果の保証」について教員間のみで議論すると学生からは「学生の能力評価」についての議論と見られがちなので、学生・教員が相互に自由に意見交換できる場とすることが重要である。これからも、この実験授業の主旨であった「暗黙知として私たちが持っている言語理解能力や知識を再認識することが、生成 AI を冷静に使えることにつながる」という視座を授業や議論を通じて学生や他の教員らと共有していきたい。

録画サイト

https://drive.google.com/drive/folders/1Wa8fvhae6Sn_T5IMf73HgPF3-oEkXe6c?usp=sharing

（小原京子）

3「学び場」プロジェクト

慶應義塾のホームページを眺めてみる。義塾の理念を、重要語句を集めて解き明かしてゆく画面が見つかる。そこに「独立自尊」や「気品の泉源」などと共に並んでいるのが「半学半教」だ。こう但し書きされている。「教える者と学ぶ者との師弟の分を定めず、先に学んだ者が後で学ぼうとする者を教える。教員と学生も半分は教えて、半分は学び続ける存在という、草創期からの精神です」。1871年のことである。慶應義塾は新銭座から三田二丁目に移った。そのとき、真っ先に福澤諭吉先生が作ったのが「慶應義塾社中之約束」。先生は記す。義塾の学問とは特定の師匠を崇め奉るようなものではない。確かに福澤諭吉が創始者であり中心的教員であるには違いない。が、かといって、福澤本人でないと教えられない特別な秘儀や秘伝があるわけではない。福澤先生はカリスマの家元ではないのである。ただ「博く洋書を読み、或は其文を講じて人に伝へ、或は之を翻訳して世に示すのみ」。「文明開化」に必要な西洋の書物を読むことができ、それを日本語にして、内容を噛み砕いて伝える。そういう授業ができれば、福澤先生に限らず誰でも教師になれる。生徒もそうなれるように勉めればよい。もしも生徒の学びが捗って、在学中に同輩後輩に手ほどきできるようになれるなら、生徒が教師を兼ねても一向に差し支えない。「今日人に学ぶも明日は又却て其人に教えることあり」。問題になるのは「人の才不才」のみである。誰が生徒でも教師でもよい。「故に師弟の分を定めず、教える者も学ぶ者も、概してこれを社中と唱ふるなり」。慶應義塾に限らず、塾というものの学びのスタイルとはそういうものであったろう。江戸時代的な塾と西洋近代的学校との違いはそこにあるのであろう。

この「半学半教」の理念を現代の日吉キャンパスに蘇らせられないか。「学び場プロジェクト」はそのためのものだ。「学び場プロジェクト」は、教養研究センターと日吉メディアセンターによる共同事業であり、教養研究センターの設置科目と連動している。「アカデミック・スキルズ」の既履修者である学生から選抜し、非常勤職員として日吉の図書館の1階に設けられている学習相談のカウンターに座ってもらい、訪れる学生に対して、レポートの書

勉強のお悩み

学習相談

で相談してみませんか？

レポートの構成が決まらない...
参考文献の書き方が分からない...
授業課題のやり方が分からない...
仮わるプレゼンって？

学部生や大学院生の
相談員が同じ学生目線で
アドバイスします！

◆実施日時 4月15日(月)～7月26日(金) 毎週平日午後
◆場所 日吉図書館1階 スタディサポート
カウンターへ直接お越しください。(WEBからの予約も可能です)

Herel

学習相談
Webサイト
予約もこちらから

問い合わせ：日吉メディアセンター hmc-ref-group@keio.jp
https://libguides.lib.keio.ac.jp/hys_studyadvice
共催：教養研究センター・日吉メディアセンター・日吉学生部 2024. 4

き方やノートの取り方などを教える。それは「アカデミック・スキルズ」の内容に通じることで、つまり、「アカデミック・スキルズ」という少人数の授業で履修者の獲得したスキルを、学習相談の窓口を通じて、より多くの学生に伝授してもらおうとする試みである。

2024年度の学習相談員の内訳は次の通り。修士1年が社会学研究科1人。学部4年が法学部2人。学部3年が文学部2人、経済学部2人、商学部3人、理工学部1人。学部2年が商学部1人、理工学部2人。総計14人。相談期間は春学期と秋学期を合わせて136日間で、相談件数は228件であった。疫病流行期が明けてから2023年度までは相談件数は増加傾向にあったが、2023年度は258件であったことを考えると、2024年度はやや減少している。理由は種々考えられるが、ひとつには、AIによる文章の自動生成環境の普及と性能の向上、およびそれに伴う大学教育の中でのレポートの役割の変化が挙げられるであろう。「半学半教」の仕組みにも見直しが必要になってくる時期なのかもしれない。

(片山杜秀)

1 日吉行事企画委員会 (HAPP)

日吉行事企画委員会（HAPP）は、日吉のキャンパス内外のコミュニティーにさまざまな共有の場を提供する、もしくは新入生を歓迎することを目的とした行事を委員会で企画し、春および秋学期においてそれらを催している。また、秋学期においては、塾生および教職員から企画を公募し、審査を経て採択した催し物を主催している。なお、委員会で企画したイベントは、継続性を有するイベントを優先して開催している。

2024年度のHAPPは、積極的に企画を主催し、公募企画2つを含む11のイベントを催した。これらには、毎年恒例となっている、舞踏公演、著名者による講演会、複数回の演奏会が開催される「日吉音楽祭」および日吉メディアセンターでのライブラリーコンサートなどが含まれていた。新しいイベントとしては、3月に改修工事を終えた、日吉陸上競技場の新しい姿を、塾生中心に見てもらいたいという目的でのお披露目的な催し物も行われた。また、今年は公募企画も2件採択することができ、結果、24年度全体を通じて、活発な活動が見られる年となった。

HAPPが主催する企画については、何らかの記録を残してきてはいるが、すべての催し物が、例えば映像記録として残されてきているわけではないの

は、改善の余地があるかもしれない。デジタル化されているような記録は、アーカイブ化するような努力も今後必要となってくるかもしれない。新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大をきっかけに試みられた、YouTubeを介したライブ配信は、録画された映像ファイルをそのままYouTube上に残しておくことができ、アーカイブ化のステップになったが、残念ながら、24年度にライブ配信を継続して行った企画は、「日吉音楽祭2024」として開かれた2つの演奏会のみに終わった。

2024年度のHAPP主催の企画は、次であった：1）「日吉陸上競技場 リニューアル記念 Enjoy Sports Day」（4月14日）、2）講演会「祭祀遺跡から古代の出雲、杵築大社の成立を考える -神と社の考古学-」（5月11日）、3）アートセンターとの共催企画、「笠井叡ポスト舞踏公演『未完成』」（5月15日）、4）図書館で行われたライブラリーコンサート（5月15日と24日および11月11日の計3公演）、5）公開シンポジウム「今、地震がおきたら？—キャンパスで考える防災—」（5月28日）、6）日吉音楽学研究室による、「日吉音楽祭2024」の枠組みで行われた演奏会2つ（6月30日および12月21日）、7）慶應義塾高校で催された、「教養の一貫教育 Vol.9 Voix/Voie 詩と音楽の交差すると

2024年度 実施企画一覧

No.	企 画 名	日 程
1	日吉陸上競技場リニューアル記念 Enjoy Sports Day	2024年4月14日（日）
2	祭祀遺跡から古代の出雲、杵築大社の成立を考える —神と社の考古学—	2024年5月11日（土）
3	新入生歓迎行事 笠井叡ポスト舞踏公演『未完成』	2024年5月15日（水）
4	ライブラリーコンサート 2024 春	2024年5月15日（水）、24日（金）
5	今、地震がおきたら？ —キャンパスで考える防災— （みなさん mirai プロジェクト）	2024年5月28日（火）
6	日吉音楽祭 2024	2024年6月30日（日） 2024年12月21日（土）
7	教養の一貫教育 Vol.9 Voix/Voie 詩と音楽の交差するところⅣ吉増剛造 x 高橋世織 x マリリア	2024年9月27日（金）
8	古楽トークコンサート：スペイン中世音楽の楽しみ アルフォンソ 10 世賢王『聖母マリアの古謡集』	2024年10月22日（火）
9	HAPPO STYROL INSTALLATION	2024年11月5日（火）～18日（月）
10	ライブラリーコンサート 2024 Jazz	2024年11月11日（月）
11	メイクで探求する個性～自分を引き立たせる技と心 松下里沙子講演会	2024年12月13日（金）

ころⅣ 吉増剛造×高橋世織×マリリア」(9月27日)、8) 3年目となった、松下里沙子氏によるワークショップとレクチャー「メイクで探求する個性～自分を引き立たせる技と心～」(12月13日)。

公募企画については、レクチャーコンサートと展示が組み合わせられたイベント「古楽トークコンサート スペイン中世音楽の楽しみ」（10月22日）と、

アウトドアでのアクティブ型展示であった「HAPPO STYROL INSTALLATION」(11月5日-18日)が実施された。

HAPP 全般については、HAPP のホームページ (<https://happ.hc.keio.ac.jp/>) をご覧いただきたい。
(石井 明)



祝リニューアル！ トラックが暑熱から復活します

⑦フィールドを
利用した各種
スポーツ大会

運動会から夏祭りに、
各学年のフィールド
大会、リニューアル
フェスティバル、サ
マーフェスティバル
など、さまざまな
イベントが企画さ
れ、盛り上がる中
に、各学年の運動
会や、リニューアル
フェスティバル、サ
マーフェスティバル
など、さまざまな
イベントが企画さ
れ、盛り上がる中
に、各学年の運動
会や、リニューアル
フェスティバル、サ
マーフェスティバル
など、さまざまな
イベントが企画さ
れ、盛り上がる中



⑧リニューアル
フェスティバル

リニューアルフェスティバルは、各学年の運動会や、リニューアルフェスティバル、サマーフェスティバルなど、さまざまなイベントが企画され、盛り上がる中、各学年の運動会や、リニューアルフェスティバル、サマーフェスティバルなど、さまざまなイベントが企画され、盛り上がる中、各学年の運動会や、リニューアルフェスティバル、サマーフェスティバルなど、さまざまなイベントが企画され、盛り上がる中



日吉陸上競技場 リニューアル記念 Enjoy Sports Day

2024年4月14日⑦

時間：10:00 ～ 15:00
会場：慶應日吉陸上競技場

お申し込みはQRコードから

お申し込み先
〒242-0292 神奈川県横浜市日吉4-1-1
慶應義塾大学 日吉キャンパス 体育館
〒242-0292 神奈川県横浜市日吉4-1-1
慶應義塾大学 日吉キャンパス 体育館

お問い合わせ先
〒242-0292 神奈川県横浜市日吉4-1-1
慶應義塾大学 日吉キャンパス 体育館
〒242-0292 神奈川県横浜市日吉4-1-1
慶應義塾大学 日吉キャンパス 体育館

お申し込み先
〒242-0292 神奈川県横浜市日吉4-1-1
慶應義塾大学 日吉キャンパス 体育館
〒242-0292 神奈川県横浜市日吉4-1-1
慶應義塾大学 日吉キャンパス 体育館

お問い合わせ先
〒242-0292 神奈川県横浜市日吉4-1-1
慶應義塾大学 日吉キャンパス 体育館
〒242-0292 神奈川県横浜市日吉4-1-1
慶應義塾大学 日吉キャンパス 体育館

⑨リニューアルフェスティバル

リニューアルフェスティバルは、各学年の運動会や、リニューアルフェスティバル、サマーフェスティバルなど、さまざまなイベントが企画され、盛り上がる中、各学年の運動会や、リニューアルフェスティバル、サマーフェスティバルなど、さまざまなイベントが企画され、盛り上がる中、各学年の運動会や、リニューアルフェスティバル、サマーフェスティバルなど、さまざまなイベントが企画され、盛り上がる中

⑩リニューアルフェスティバル

リニューアルフェスティバルは、各学年の運動会や、リニューアルフェスティバル、サマーフェスティバルなど、さまざまなイベントが企画され、盛り上がる中、各学年の運動会や、リニューアルフェスティバル、サマーフェスティバルなど、さまざまなイベントが企画され、盛り上がる中、各学年の運動会や、リニューアルフェスティバル、サマーフェスティバルなど、さまざまなイベントが企画され、盛り上がる中



祭

社

祭祀遺跡から 古代の出雲、杵築太社の成立を考える

― 神と社の考古学 ―

『出雲の古代』刊行を記念してはじめて、
神々のあふいたる出雲の山間、
かつて杵築太社とよびたれた天照大神を中心、
神々をえんえとすばり祭る神域です。

近年、この出雲に行けば歴史の舞台が、
神々の世界にいまも生き生きと明かれています。
今、杵築太社についてもその明かされたこと、
古代世界にわたるその神話の物語に目をむく、
神々のあふいたる出雲の山間、
神々のあふいたる杵築太社の成立を、神話から読みとく、
神々のあふいたる杵築太社の成立を、神話から読みとく、
神々のあふいたる杵築太社の成立を、神話から読みとく、







2024年

5月11日土

14:00～16:00
(13:30開場)

慶應義塾大学 日吉キャンパス
第1会館4階 23号室
参加無料（登録制、対面のみ）
※参加無料にも事前申し込みが必要（100名定員）

講師
講師… 藤生 倫
（慶應義塾大学名誉教授、日本文化研究所
所長）





主催：慶應義塾大学 日吉キャンパス 第1会館4階 23号室
主催：慶應義塾大学 日吉キャンパス 第1会館4階 23号室
主催：慶應義塾大学 日吉キャンパス 第1会館4階 23号室



慶應義塾大学

企画：斎藤（津波）風見（国語学専攻）・日本文化研究所
主催：慶應義塾大学 日吉キャンパス 第1会館4階 23号室
主催：慶應義塾大学 日吉キャンパス 第1会館4階 23号室

未完成

Die Unvollendete

出演 笠井 淑

・音楽・照明 曾我 僚

2024年11月5日(土)

15:00開演

18:00開演 17:00開演

東京芸術大学打合キッズ・未来芸術センター

舞臺の奥に居る方へ！

見立劇場、楽団、照明、楽団指揮、舞臺美術、舞臺美術下地

アクリン・アクリン・アクリン

人形製作所：Amakoshi Free

Sein University Music Campus, Nishita Fumi Tetsu

Hiroshi H. Kishida, Yachika

Akemi Kato, Hayashi, Kato

Y. Kato, Y. Kato, Y. Kato, Y. Kato, Y. Kato, Y. Kato

Yachika Music and Sound Group (LIVE)

座席販売大学教育研究センター Hiyoshi Art & Performance Project (HAPP)

日吉図書館

Library Concert 2024

at Hiyoshi Library

5.15 Wed.15:00 ~

Quartet

1st Violin
木田 隼子

2nd Violin
三木 希生子

Viola
板本 空洋子

Cello
加藤 陽子

5.24 Fri.15:00 ~
17:15 ~

Jazz

Hammond Organ
土田 晴信

Guitar
鈴木 洋一

Drum
中村 誠

予約不要・入場自由（字内入・図書館入館資格のある方）

No reservation required / Only Persons eligible for admission to the library

https://library.lik.kan-u.ac.jp/bv_events/2024/libcn2024

主 催：座席販売大学教育研究センター 日吉学術大会委員会（HAPP） / 日吉メディアセンター
問合せ：日吉メディアセンター Email: happc@cc.kan-u.ac.jp



ESPLENDOR
CANIATO
CANARIO DE
SANTA MARIA DE
ALFONSO X EL
SABIO



2024年10月22日(火)
15:00~16:30
 (開場 14:45)
 日吉図書館
 地下1階 AVホール
 予約券 入場自由(文字音・
 聴覚に障害のある方)
 No reservation required /
 Only persons eligible for
 admission to the library

古楽トークコンサート スペイン中世音楽の楽しみ
アルフォンソ10世賢王
『聖母マリアの古謡集』

中世イベリヤ詩歌の名作『聖母マリアの古謡集』(1270-83年)に關する講演と演奏 (古楽バンド イベロリタ)。および、豊後県立図書館所蔵の録音作品の写本本 (MS.1.1) フォノマリアの展示を行います。中世ヨーロッパ音楽の生きた実感を、豊後県民の誇りの育地に生かせる貴重な機会です。

問い合わせ：日吉図書館
library@city-nishiki.jp




『聖母
 豊後県民の誇りの育地に生かせる
 録音作品の写本本 (MS.1.1) フォノマリアの展示
 日吉図書館蔵本 (Emphatic
 Art & Photo Project) (SABP)
 協力
 日吉メディアセンター
 三浦メディアセンター




予約不要・入場自由（宇内書・図書館入館資格のある方）
 No reservation required / Only Persons eligible for admission to the library
https://libguides.lib.kobe.ac.jp/hyrc_events/2024/libcon2024fall

主催：阪神農芸大学教養研究センター・日行行事企画委員会（HAPP）/ 日吉メディアセンター

HAPPO STYROL INSTALLATION

参加型アート

文字を剥がし、色彩を与え、みんなで作りに上げろ 参加型アート

会場：倉庫蔵塾大塚日吉キャンパス 第5校舎会館
対象：学生限定【参加無料】

2024
11/11 mon

参加型アートと装置を展示し、
朝から文字が浮かび上がるアートを作り上げよう！

前期 11/5 Tue - 8 Fri 12:00 - 18:00	後期 11/12 Tue - 18 Mon 12:00 - 18:00【平日のみ】
--	--

参加型アートにネットワークで文字を剥がそう！
自分たちが作り出した文字で遊ぼう！

★ワークショップ
ご参加ください

会場：理工学図書館・建築デザイン研究室
(佐野智史研究室)

参加費：無料
申し込み：不要
申し込み先：佐野智史研究室

東京造形大学芸術研究センター
Myself (Art & Performance Project) (MAPP)

新入生歓迎行事

松下手塚子
ワークショップリーダー
No.3

個性を
求める
メイク
で
自分を引き立てる技と心

2024.12.13 (Fri)
16:30-18:30
慶應義塾大学日吉キャンパス 来学生会館2室

講師 松下手塚子
メイクアップアーティスト。慶應義塾大学芸術研究センター所属。美容専門学校でメイクを習得して、様々な仕事に携わった。1年3学期で専攻、専攻科へ入った。現在はファッションビルにてメイクを担当中。NYCに在住。メイクアップ COACH、JACOB MARC、MARNIに在学中。メイクアップの勉強会として、メイクアップの勉強会、2023年12月、2024年1月、2024年2月、2024年3月、2024年4月、2024年5月、2024年6月、2024年7月、2024年8月、2024年9月、2024年10月、2024年11月、2024年12月、2025年1月、2025年2月、2025年3月、2025年4月、2025年5月、2025年6月、2025年7月、2025年8月、2025年9月、2025年10月、2025年11月、2025年12月、2026年1月、2026年2月、2026年3月、2026年4月、2026年5月、2026年6月、2026年7月、2026年8月、2026年9月、2026年10月、2026年11月、2026年12月、2027年1月、2027年2月、2027年3月、2027年4月、2027年5月、2027年6月、2027年7月、2027年8月、2027年9月、2027年10月、2027年11月、2027年12月、2028年1月、2028年2月、2028年3月、2028年4月、2028年5月、2028年6月、2028年7月、2028年8月、2028年9月、2028年10月、2028年11月、2028年12月、2029年1月、2029年2月、2029年3月、2029年4月、2029年5月、2029年6月、2029年7月、2029年8月、2029年9月、2029年10月、2029年11月、2029年12月、2030年1月、2030年2月、2030年3月、2030年4月、2030年5月、2030年6月、2030年7月、2030年8月、2030年9月、2030年10月、2030年11月、2030年12月、2031年1月、2031年2月、2031年3月、2031年4月、2031年5月、2031年6月、2031年7月、2031年8月、2031年9月、2031年10月、2031年11月、2031年12月、2032年1月、2032年2月、2032年3月、2032年4月、2032年5月、2032年6月、2032年7月、2032年8月、2032年9月、2032年10月、2032年11月、2032年12月、2033年1月、2033年2月、2033年3月、2033年4月、2033年5月、2033年6月、2033年7月、2033年8月、2033年9月、2033年10月、2033年11月、2033年12月、2034年1月、2034年2月、2034年3月、2034年4月、2034年5月、2034年6月、2034年7月、2034年8月、2034年9月、2034年10月、2034年11月、2034年12月、2035年1月、2035年2月、2035年3月、2035年4月、2035年5月、2035年6月、2035年7月、2035年8月、2035年9月、2035年10月、2035年11月、2035年12月、2036年1月、2036年2月、2036年3月、2036年4月、2036年5月、2036年6月、2036年7月、2036年8月、2036年9月、2036年10月、2036年11月、2036年12月、2037年1月、2037年2月、2037年3月、2037年4月、2037年5月、2037年6月、2037年7月、2037年8月、2037年9月、2037年10月、2037年11月、2037年12月、2038年1月、2038年2月、2038年3月、2038年4月、2038年5月、2038年6月、2038年7月、2038年8月、2038年9月、2038年10月、2038年11月、2038年12月、2039年1月、2039年2月、2039年3月、2039年4月、2039年5月、2039年6月、2039年7月、2039年8月、2039年9月、2039年10月、2039年11月、2039年12月、2040年1月、2040年2月、2040年3月、2040年4月、2040年5月、2040年6月、2040年7月、2040年8月、2040年9月、2040年10月、2040年11月、2040年12月、2041年1月、2041年2月、2041年3月、2041年4月、2041年5月、2041年6月、2041年7月、2041年8月、2041年9月、2041年10月、2041年11月、2041年12月、2042年1月、2042年2月、2042年3月、2042年4月、2042年5月、2042年6月、2042年7月、2042年8月、2042年9月、2042年10月、2042年11月、2042年12月、2043年1月、2043年2月、2043年3月、2043年4月、2043年5月、2043年6月、2043年7月、2043年8月、2043年9月、2043年10月、2043年11月、2043年12月、2044年1月、2044年2月、2044年3月、2044年4月、2044年5月、2044年6月、2044年7月、2044年8月、2044年9月、2044年10月、2044年11月、2044年12月、2045年1月、2045年2月、2045年3月、2045年4月、2045年5月、2045年6月、2045年7月、2045年8月、2045年9月、2045年10月、2045年11月、2045年12月、2046年1月、2046年2月、2046年3月、2046年4月、2046年5月、2046年6月、2046年7月、2046年8月、2046年9月、2046年10月、2046年11月、2046年12月、2047年1月、2047年2月、2047年3月、2047年4月、2047年5月、2047年6月、2047年7月、2047年8月、2047年9月、2047年10月、2047年11月、2047年12月、2048年1月、2048年2月、2048年3月、2048年4月、2048年5月、2048年6月、2048年7月、2048年8月、2048年9月、2048年10月、2048年11月、2048年12月、2049年1月、2049年2月、2049年3月、2049年4月、2049年5月、2049年6月、2049年7月、2049年8月、2049年9月、2049年10月、2049年11月、2049年12月、2050年1月、2050年2月、2050年3月、2050年4月、2050年5月、2050年6月、2050年7月、2050年8月、2050年9月、2050年10月、2050年11月、2050年12月、2051年1月、2051年2月、2051年3月、2051年4月、2051年5月、2051年6月、2051年7月、2051年8月、2051年9月、2051年10月、2051年11月、2051年12月、2052年1月、2052年2月、2052年3月、2052年4月、2052年5月、2052年6月、2052年7月、2052年8月、2052年9月、2052年10月、2052年11月、2052年12月、2053年1月、2053年2月、2053年3月、2053年4月、2053年5月、2053年6月、2053年7月、2053年8月、2053年9月、2053年10月、2053年11月、2053年12月、2054年1月、2054年2月、2054年3月、2054年4月、2054年5月、2054年6月、2054年7月、2054年8月、2054年9月、2054年10月、2054年11月、2054年12月、2055年1月、2055年2月、2055年3月、2055年4月、2055年5月、2055年6月、2055年7月、2055年8月、2055年9月、2055年10月、2055年11月、2055年12月、2056年1月、2056年2月、2056年3月、2056年4月、2056年5月、2056年6月、2056年7月、2056年8月、2056年9月、2056年10月、2056年11月、2056年12月、2057年1月、2057年2月、2057年3月、2057年4月、2057年5月、2057年6月、2057年7月、2057年8月、2057年9月、2057年10月、2057年11月、2057年12月、2058年1月、2058年2月、2058年3月、2058年4月、2058年5月、2058年6月、2058年7月、2058年8月、2058年9月、2058年10月、2058年11月、2058年12月、2059年1月、2059年2月、2059年3月、2059年4月、2059年5月、2059年6月、2059年7月、2059年8月、2059年9月、2059年10月、2059年11月、2059年12月、2060年1月、2060年2月、2060年3月、2060年4月、2060年5月、2060年6月、2060年7月、2060年8月、2060年9月、2060年10月、2060年11月、2060年12月、2061年1月、2061年2月、2061年3月、2061年4月、2061年

慶應義塾大学日吉音楽学研究室

2024年度藤原洋記念ホール演奏会シリーズ

全公演入場無料・事前申込不要

December 24, 2024

室内楽・ピアノ
マツソコナート

出演：慶應義塾大学学生
指揮者 藤原洋 氏（故人）
[日時] 2024年12月21日（土）
14:00開演（15:00開演）
会場：マツソコナート（〒252-0292 横浜市青葉区青葉2-1-1）
チケット：無料（※当日は入場券を配布）

January 8, 2025

慶應義塾大学コレギウム・
ムジカム・オーケストラ演奏会

出演：慶應義塾大学コレギウム・ムジカム
指揮者 藤原洋 氏（故人）
[日時] 2025年1月8日（水）
14:00開演（15:00開演）
会場：マツソコナート（〒252-0292 横浜市青葉区青葉2-1-1）
チケット：無料（※当日は入場券を配布）

January 12, 2025

慶應義塾大学音楽カプチャー
オーケストラ・小合唱演奏会

出演：慶應義塾大学音楽カプチャー
指揮者 藤原洋 氏（故人）
全席無料 [日時] 期 未定
会場：日吉 期 未定
[日時] 2025年12月（日）
14:00開演（15:00開演）
会場：ゾロチナ・マツソコナート（〒252-0292 横浜市青葉区青葉2-1-1）
チケット：無料（※当日は入場券を配布）

場 所：藤原洋記念ホール（慶應義塾大学日吉キャンパス協賛建物内）
[日曜] 無料（聴衆） 日曜：聴衆参加（演奏者参加費 無料）
主 催：慶應義塾大学音楽学研究室（〒252-0292 横浜市青葉区青葉2-1-1）
協賛：慶應義塾大学音楽教育センター January 8, 2025 January 12, 2025
協賛：慶應義塾大学日吉音楽学研究室 January 8, 2025 January 12, 2025
問合せ：慶應義塾大学日吉音楽学研究室 045-566-1199 <http://www.musiclab.jp/kyushu>

Designed By Katsuhiro Hatanaka (Hatanaka Office, Kasei University)

2 日吉キャンパス公開講座

2024 年度の「日吉キャンパス公開講座」は前身の「横浜市民大学講座」から数え 50 回目となり、10 月 5 日から 11 月 30 日までの日程で開催した。統一テーマについては、4 月 15 日に実施の公開講座運営委員会にて、委員長の素案を元に議論の結果、「際（きわ）」に決定した。講師陣についても、委員長の素案に各委員からの提案も加え、委員会として候補者リストを作成、順次講演依頼を行い、後述の表のような陣容とした。

開催にあたり、テーマ概要として示した文章は以下の通りである（この部分のみ原文のままとするため、丁寧語で記すこととする）。

「際（きわ）」という一文字から何を連想されるでしょうか。人生を生きる上で、様々な「際」が存在し、それらを時に、或いは日々意識し、影響を受けているように感じられます。日本漢字能力検定協会が 1995 年から毎年発表しています「今年の漢字」一文字として「際」はまだないようですが、「際」を使った熟語は多く、国際、交際、学際、山際、窓際、壁際、往生際、際限、分際、間際、球際などがあり、また、波打ち際、際どい、散り際、土俵際といった使い方もあります。「際」を英語の inter- に相当すると考えれば、international（国際）、inter-

慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座

【全 5 日】

際（きわ）

2024 年
10 月 5 日（土）
▼
11 月 30 日（土）

講座内容

① 3 時限目 (13:00~14:30) ② 4 時限目 (14:45~16:15)

挨拶 (12:35~12:40)	奥田曜代 慶應義塾大学准教授
趣旨説明 (12:40~12:50)	寺沢和洋 慶應義塾大学文学部教授 日吉キャンパス公開講座運営委員長
① 人生、再起動 — 石原裕次郎の流儀、そして、遺したもの—	増田久雄 映画監督 J2 フェーサー—監督/作家
データの破壊力 — 社会科学とデータサイエンスの際を考える—	清水千弘 「データサイエンス」データサイエンス研究科教授
野球のチカラでアフリカと日本の未来を創る — エンジョイベースボールを国際協力に—	友成晋也 一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構 (J-ABS) 代表理事
② 別れ際の経験と経験の別れ際 — 知識の構築について—	荒金直人 慶應義塾大学理工学部准教授
③ 「自己」と「非自己」の境界 — 生物学の視点から—	古川亮平 慶應義塾大学文学部准教授
④ 「身寄りのない単身高齢者の住まい問題」を考える — クロスオーバーが解決への道—	伊部尚子 ((公財)日本賃貸住宅管理協会 あんしん居住研究会 委員)
⑤ 太陽系探査機のとばし方 — 重力圏の際を考える—	森本睦子 慶應義塾大学法学部助教 (日吉物理学教室)
⑥ デザインで自分をブラッシュアップする時代 — < デザインの民主化・生成 AI > がもたらす可能性—	鈴木一好 デザインコンサルタント兼 クリエイティブディレクター
⑦ 日中の境を超えた人、知識、言葉 — 中国の際—	山口早苗 慶應義塾大学理工学部専任講師
⑧ 中国の際 — どこからどこまでが中国なのか—	山下一夫 慶應義塾大学理工学部教授

募集要項 (要項にご覧ください)

募集対象 社会人ほか

募集定員 350 名 先着順受付。定員に達し次第、締め切りとさせていただきます。

会場 慶應義塾大学日吉キャンパス内

受付期間 2024 年 9 月 2 日 (月) 9 時~9 月 18 日 (水) 17 時まで

受講料 8,000 円 (全 5 日)

申込方法 教養研究センターホームページからお申し込みください。

申込受付 申し込み受付後、順次先着順をお知らせします。受講料の振込みをもって受講料の納入となりますので、振込日までに受講料の振込みをお願いします。

特典 期間中、日吉図書館をご利用いただけます。(貸し出しは不可。要面相談)。

全 5 日中、3 日以上出席の方に修了証の授与および慶應義塾大学教養研究センター選書 (書籍) 1 冊を贈呈いたします。

● 個人情報保護の取扱い
慶應義塾大学教養研究センター主催「日吉キャンパス公開講座」受講にあたってお知らせいただいた個人情報は、「日吉キャンパス公開講座」を含む同センターからのお知らせのみに利用し、慶應義塾大学に提供されることはありません。また、個人情報を第三者に提供することはありません。

慶應義塾大学教養研究センター
URL: <https://lib-arts.hc.kyoto.ac.jp>

face (境界面)、interaction (相互作用)、intercept (妨害する)、intermediate (中間物)、interchange (置き換える)、interstellar (星間の)、interplane-

講義日		講師	テーマ
10 月 5 日 (土)	3 時限目	増田 久雄 (映画演劇プロデューサー・監督/作家)	人生、再起動 — 石原裕次郎の流儀。そして、遺したもの—
	4 時限目	清水 千弘 (一橋大学ソーシャル・データサイエンス研究科教授)	データの破壊力 — 社会科学とデータサイエンスの際を考える—
10 月 26 日 (土)	3 時限目	友成 晋也 (一般財団法人アフリカ野球・ソフト振興機構 (J-ABS) 代表理事)	野球のチカラでアフリカと日本の未来を創る — エンジョイベースボールを国際協力に—
	4 時限目	荒金 直人 (慶應義塾大学理工学部准教授)	別れ際の経験と経験の別れ際 — 知識の構築について—
11 月 2 日 (土)	3 時限目	古川 亮平 (慶應義塾大学文学部准教授)	「自己」と「非自己」の境界 — 生物学の視点から—
	4 時限目	伊部 尚子 ((公財)日本賃貸住宅管理協会 あんしん居住研究会 委員)	「身寄りのない単身高齢者の住まい問題」を考える — クロスオーバーが解決への道—
11 月 16 日 (土)	3 時限目	森本 睦子 (慶應義塾大学法学部助教 (日吉物理学教室))	太陽系探査機のとばし方 — 重力圏の際を考える—
	4 時限目	鈴木 一好 (デザインコンサルタント兼クリエイティブディレクター)	デザインで自分をブラッシュアップする時代 — < デザインの民主化・生成 AI > がもたらす可能性—
11 月 30 日 (土)	3 時限目	山口 早苗 (慶應義塾大学理工学部専任講師)	日中の境を超えた人、知識、言葉
	4 時限目	山下 一夫 (慶應義塾大学理工学部教授)	中国の際 — どこからどこまでが中国なのか—

2024 年度

34

活動報告



荒金直人氏



山下一夫氏



山口早苗氏



講義風景

tary（惑星間の）など、「国際」のように日本語訳として「際」が使われているものもありますが、使われていない言葉であっても、その意味合いを感じ取ることができます。

2つのモノ・コトの「際」（或いは境界）が明確、連続的、はっきりしない場合など、「際」も色々です。そんな「際」にまつわる内容について、組織間や時代の変わり目、空間や立場の違い、学際的な分野などの、「際（きわ）を攻める、裾野を広げる、越境する」といったことに関連するエピソードを集め、皆様と共に考察できればと考えております（テーマ概要はここまで）。

各実施日・講演タイトル・講演者については別表・ポスターを参照いただきたい。

受講申し込みについてはweb経由のみというコロナ禍のやり方を踏襲し、受講者は定員の350名丁度となった。受講生のアンケート結果としては、アンケート提出者のうち87%から「満足」との回答を得ることができた。今後もアンケート等の意見を参考に、改善できる点は積極的に改善し、トレードオフとなる要素については慎重に検討したい。また、魅力ある統一テーマの設計に尽力し、日吉キャンパス・慶應義塾の特徴を大いに活かして、身近なテーマから大学の先端の研究開発の話題まで、分野横断的な講座を今後も実施していきたいと考えている。

（寺沢和洋）

3「創造力とコミュニティ」 研究会

—持続可能性の創造力

本研究会が設立されてから6年目を迎える本年度は、持続可能性をテーマにコミュニティづくりや創造的な活動を行っている団体やアーティストを招いて、自然との共存、環境保全、自分の精神の健康などをテーマとしたコミュニティづくりについて、学生とともに考察する研究会を7回開催した。以下、具体的にその内容を見ていく。

1) 動物と自然との共存、そしてコミュニティ

第23回(7月23日)、第24回(8月27日)は、サイエンスライターで日本の鳥飼史研究者として名高い細川博昭氏を招き、2回連続の研究会を開催した。1回目は私たちのコミュニティの中でのペットの位置づけについて、歴史的に俯瞰していった。その中で人間もまた、ペットたちと共に進化した様子を跡付けた。2回目はペットとしての鳥に焦点を当て、鳥たちがどのように人間との共存を図っているのかを、鳥の視点から解き明かしていった。第25回目(9月24日)は藍染め・草木染めの染色家の柏崎久恵氏をお迎えし、自然の持つ豊かな色彩の美しさと植物の無尽蔵の力について語ってもらった。柏崎氏は単に染色家であるのみならず、失われゆく染色のための植物を種から育てることでその命を見つめ、その力をゆっくりと藍染めや草木染めに活かし、生活に取り入れるための教育活動も行っている。以上すべての回に多くの学生が参加した。特にキャンパスでも染色を行っている学生たちも自分たちの染色作品を持ってきてくれた。

2) 多様性：様々な人との共存

第26回(10月29日)は、多様性に注目したアートを確認し、誰もがアートを通じてよりよい生き方を模索できるプロジェクトを多数誕生させているアートチーム、LITTLE ARTISTS LEAGUEの代表理事、ルミコ・ハーモニー氏を迎えて、組織の哲学・様々な機関との関わり・アート作品を通じてどんな社会的インパクトを与えてきたのかを話していただいた。ハーモニー氏は2024年秋には障がい者向けの美術教育についての研究発表を大学と組んでおこなうほか、2025年1月26日～28日には横浜の象の鼻テラスにて、展覧会《INVISIBLE MUSEUM～見えない大切な何かを探す展～》を開催するなど、広くコミュニティに働きかけている。今回の研究会では簡単なワークも導入して、能動的な

アート思考を参加者も体感してみた。

3) 食べ物から考える持続性

第27回(11月5日)は、「ヨコハマ喫茶去」の名のもとに、研究会そのものを、喫茶店にたとえて、人と人が集まるコミュニティとしての喫茶店の役割、そして、コーヒー豆を通してのグローバルな流通について考えた。講師に迎えたのは、自らも喫茶店で働き、バリスタでもあるNOZOMI氏である。この日は喫茶店の役割のみならず、フェアト

社会課題をアートで解決するグローバルアートチーム
LITTLE ARTISTS LEAGUEは、ダイバーシティアート（多様性の力）を通じて、誰もが生き生きと暮らす世界にしたいと目指しています。

Diversity Art

慶応義塾大学教養センター / 居場所「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会主催
創造力とコミュニティ研究会 26

**社会課題をアートで解決するグローバルアートチーム
LITTLE ARTISTS LEAGUEの全て**

今回の研究会では、多様性に注目したアートを確認し、誰もがアートを通じてよりよい生き方を模索できるアートプロジェクトを多数誕生させているアートチーム、LITTLE ARTISTS LEAGUEの代表理事、ルミコ・ハーモニー氏をお迎えして、組織の哲学・様々な機関との関わり・アート作品を通じてどんな社会的インパクトを与えてきたのかを話していただきました。2024年秋には障がい者向け美術教育についての研究発表を大学と組んでおこなうほか、2025年1月26日～28日には横浜の象の鼻テラスにて、展覧会《INVISIBLE MUSEUM～見えない大切な何かを探す展～》を開催予定です。今回の研究会では簡単なワークも導入して、能動的なアート思考も体感してみます。

<https://www.littleartistsleague.org/> <https://www.instagram.com/littleartistsleague/>

話題提供者：LUMICO HARMONY (ルミコ・ハーモニー)
アーティスト / LITTLE ARTISTS LEAGUE代表理事

日時：2024年10月29日(火) 18:30～20:00 (予定)
会場：居場所「カドベヤ」横浜市中区石川町5丁目209-3 1階

参加費無料。「カドベヤ」については以下をご覧ください。 <https://ameblo.jp/kadobeya2010/>
参加ご希望の方は、法字部・横山千晶 (chacky@kato.jp) までご連絡ください。
体調不良の際は、申し訳ございませんが参加をお控えください。

創造力とコミュニティ研究会 27

ヨコハマ喫茶去

主催：「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会
慶応義塾大学教養センター

“喫茶店”に集う人達はコーヒーが好きだったり、人とおしゃべりするの好きだったり、理由はさまざまです。

時代と共に喫茶店の在り方は変化します。レコードが入らない頃は、音楽を聴きに行く場所として。携帯電話がなかった頃は、待ち合わせの場所として。喫茶店は、あらゆる垣根を越えて人と人が出会う場所です。美味しいコーヒーを用意してお待ちしております。どなたもお気軽にどうぞください。

Performer : Nozomi (野々原)
Date : 2024/11/5 (Tue) 18:00-20:00
Place : カドベヤ 横浜市中区石川町5丁目209-3 F1
Entrance : Free

参加ご希望の方は、[法字部・横山千晶]までご連絡ください。
(chacky@kato.jp)

主催「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会
慶応義塾大学教養センター

レードなどのコーヒー豆の流通と持続可能性についても語ってもらった。実際に慶應義塾大学の学生たちも NOZOMI 氏の手ほどきで、豆を挽き、コーヒーを入れる体験を行い、異なるコーヒー豆の味わいを体験した。食は作り手と消費者をつなげるツールであるが、だれが自分たちの食を支えているのかはわかりにくい。現在では温暖化の影響でコーヒー豆の生産がままならない状況も続いている。私たちの日ごろの行いそのものが、作り手の生活を脅かすことにもなりかねないという社会問題も共に考える時間とした。

4) 生と死の循環：死ぬ私のその後を考える

第28回（1月28日）は、私たち自身の「生」と「死」のつながりを考える回とした。生きることとその生を終えることは分断ではなく、一つの循環である。そして人間もまた、大きな環境の一部であるのなら、その生もまたやがては自然に戻り次の命を生み出すものであるという考えは、私たちの祖先が大切にはぐくんできた思想であり、実は家制度に基づいた「墓」の思想は、新しいものであった。今回は、大阪府能勢妙見山の森で、「循環葬[®]」という取り組みを始めた at FOREST 株式会社代表の小池友紀氏をお迎えして、循環する生、人と自然の関係について、歴史から紐解くお話を伺った。話の中ではイギリスの自然葬の実地調査の紹介も含め、日本だけではなくグローバルな死生観も考察した。宗教との関係やビジネスとしての一面に関しても参加者と活発な質疑応答とディスカッションが展開された。

5) 自分と向き合い自分を持続させる

本年度最後の第29回（2月11日）の研究会は「砂で描く、私の心」と題して、アーティストの「まじあと & こーた」の二人を招いて、砂絵のワークショップを行った。砂に触れながら、自分の気持ちを自由な絵に描いていく行為は、自分と向き合う時間でもあり、単に筆で描くのとまた異なる表現プロセスを踏む。指を使い、砂と向き合うことで、新たな表現と自分に出会う。90分のワークショップを通して作品を作り、それぞれが自分の作品について語ることによって、今一人の自分との出会いを果たすワークショップの時間となった。

今回は関東のみならず、兵庫県からも講師を招くことが可能となった。昨年度より学生たちの参加も増え、実際にコミュニティ活動を展開している学生たちも多く参加し、コミュニティ、多様性、共存、といったキーワードに対する学生たちの興味の深さが感じられた。特に印象的だったのは、第28回の生と死の循環の回である。実際に身近な人の死を経験した学生が、自分なりに死の意味を模索する姿を参加者全員で受け止める回となった。カドバヤというキャンパスとは異なる場を会場として使うことは、多様な人々とのコミュニティの創設にもつながることを実感した1年であった。

（横山千晶）

1 慶應義塾大学教養研究センター規程

平成14年7月2日制定

(設置)

第1条 慶應義塾大学（以下、「大学」という。）に、慶應義塾大学教養研究センター（Keio Research Center for the Liberal Arts。以下、「センター」という。）を置く。

(目的)

第2条 センターは、多分野・多領域にまたがる内外の交流・連携に基づく教養研究活動を推進およびこれに関する教育活動を行うことで、知の継承と発展に貢献することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 教養研究を中心とした知の継承と拡大、発展に資する研究活動
- 2 前号の事業に関する授業科目の設置と教育活動
- 3 教養研究および教育活動に基づく学内外の交流活動の企画、支援
- 4 教養研究および教育活動への助成および支援
- 5 教養研究および教育活動状況の把握と情報の収集および発信
- 6 その他センターの目的達成のために必要な事業

(組織)

第4条 ① センターに次の教職員を置く。

- 1 所長
- 2 副所長 若干名
- 3 所員 若干名
- 4 研究員 若干名
- 5 事務長
- 6 職員 若干名

② 所長は、センターを代表し、その業務を統括する。

③ 副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるときはその職務を代行する。

④ 所員は、原則として兼担所員とし、センターの目的達成のために必要な研究および職務に従事する。

⑤ 研究員は、特任教員、研究員（有期）または兼任研究員とし、所長の指示に従い研究に従事する。

⑥ 国内および国外の大学、専門研究機関からの派遣研究者に関しては、別に訪問研究者を置くこと

ができる。

⑦ 事務長は、センターの事務を統括する。

⑧ 職員は、事務長の指示により必要な職務を行う。

(運営委員会)

第5条 ① センターに運営委員会を置く。

② 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 所長
- 2 副所長
- 3 事務長
- 4 大学各学部長
- 5 大学各学部日吉主任
- 6 日吉研究室運営委員長
- 7 日吉メディアセンター所長
- 8 日吉 KIC を担当する KIC 所長、もしくは副所長
- 9 体育研究所長
- 10 外国語教育研究センター所長
- 11 自然科学研究教育センター所長
- 12 日吉キャンパス事務長
- 13 その他所長が必要と認めた者

③ 委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

④ 運営委員会は所長が招集し、その議長となる。

⑤ 運営委員会は、次の事項を審議する。

- 1 センター運営の基本方針に関する事項
- 2 センターの事業計画に関する事項
- 3 研究プログラムに関する事項
- 4 人事に関する事項
- 5 予算・決算に関する事項
- 6 コーディネート・オフィスに関する事項
- 7 その他必要と認める事項

(コーディネート・オフィス)

第6条 ① センターの事業活動を円滑かつ効率的に遂行するために、運営委員会の下にコーディネート・オフィスを置く。

② コーディネート・オフィスは、所長、副所長、事務長およびコーディネーター若干名をもって構成する。コーディネーターは、所長、副所長、事務長とともに、センターの事業を推進する。

③ コーディネート・オフィスは、必要に応じて委員会を置き、センターの事業活動の一部を付託す

ることができる。

(特別委員会)

第7条 運営委員会は、必要に応じて特別委員会を置き、第5条第5項に定める審議事項の一部について審議を付託することができる。

(教職員の任免)

第8条 ① センターの教職員等の任免は、次の各号による。

- 1 所長は、大学評議会の議を経て塾長が任命する。
- 2 副所長、所員および兼任研究員は、所長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て塾長が任命する。
- 3 特任教員および研究員（有期）については、「任免規程（就）（昭和27年3月31日制定）」の定めるところによる。
- 4 訪問研究者については、「訪問学者に対する職位規程（昭和51年8月27日制定）」の定めるところによる。
- 5 事務長および職員については、「任免規程（就）（昭和27年3月31日制定）」の定めるところによる。
- 6 コーディネーターは、所員および義塾職員の中から、所長が推薦し、運営委員会が委嘱する。

② 所長、副所長およびコーディネーターの任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

③ 所員の任期は2年とし、重任は妨げない。

④ 兼任研究員の任期は、次条に定める研究プログラムの研究期間とする。

(研究プログラム)

第9条 ① センターに次の研究プログラムを置く。

- 1 基盤研究：専任教員が核となって展開する、教養研究を中心とした共同研究
- 2 一般研究：センターが必要と認めた個人研究または共同研究
- 3 特定研究：センターが企画、立案した研究

② 研究プログラムの企画・募集・選定・管理・統括等の詳細については、運営委員会で別に定める。

(契約)

第10条 ① 外部機関等との契約は、慶應義塾の諸規程等に則り行うものとする。

② 学内機関等との契約は、運営委員会の議を経て所長が行うものとする。

(経理)

第11条 ① センターの経理は、「慶應義塾経理規程（昭和46年2月15日制定）」の定めるところによる。

② センターの経費は、義塾の経費、委託研究資金、国または地方公共団体等からの補助金、寄附金およびその他の収入をもって充てるものとする。

③ 外部資金の取扱い等については、調達会計部の定めるところによる。

(規程の改廃)

第12条 この規程の改廃は、運営委員会の審議に基づき、大学評議会の議を経て塾長が決定する。

附 則

① この規程は、平成14年7月1日から施行する。

② この規程は、施行後3年を目途に見直すものとする。

附 則（平成17年6月3日）

この規程は、平成17年6月3日から施行する。

附 則（平成18年5月9日）

この規程は、平成18年5月9日から施行し、平成18年5月1日から適用する。

附 則（平成20年5月1日）

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則（平成20年11月4日）

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則（平成21年12月15日）

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則（平成23年3月29日）

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則（平成26年12月5日）

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

附 則（2020年6月2日）

この規程は、2020年7月1日から施行する。

附 則（2023年9月12日）

この規程は、2023年10月1日から施行する。

附 則（2024年3月29日）

この規程は、2024年3月29日から施行する。

2 運営委員会委員

2024年4月1日～2025年3月31日在籍者
第12期（2023年10月1日～2025年9月30日）

教養研究センター担当常任理事

奥田 暁代

教養研究センター所長

片山 杜秀

教養研究センター副所長

高橋 宣也

鈴木 亮子

三原龍太郎

寺沢 和洋

教養研究センター事務長

安川 力（2024年5月31日まで）

黒田 修生（2024年10月31日まで）

佐藤 朋（2024年11月1日から）

文学部長 佐藤 孝雄

経済学部長 駒形 哲哉

法学部長 堤林 剣

商学部長 牛島 利明

医学部長 金井 隆典

理工学部長 村上 俊之

総合政策学部長

加茂 具樹

環境情報学部長

一ノ瀬友博

看護医療学部長

野末 聖香

薬学部長 有田 誠

文学部日吉主任

市川 崇

経済学部日吉主任

中野 泰志

法学部日吉主任

大久保教宏

商学部日吉主任

段 瑞聡

医学部日吉主任

井上 浩義

理工学部日吉主任

小菅 隼人

薬学部日吉主任

大澤 匡範

体育研究所所長

須田 芳正

日吉メディアセンター所長

横山 千晶

KIC 副所長 / 日吉地区

小林 宏充

外国語教育研究センター所長

七字 眞明（2024年9月30日まで）

山下 一夫（2024年10月1日から）

自然科学研究教育センター所長

岡本 昌樹

日吉研究室運営委員会委員長

七字 眞明（2024年9月30日まで）

荒畑 靖宏（2024年10月1日から）

日吉キャンパス事務長

黒田 修生（2024年10月31日まで）

繁森 隆（2024年11月1日から）

日吉学生部事務長

渡部 隆志

日吉メディアセンター事務長

関口 素子

日吉キャンパス事務センター課長

川田 孝征（2024年5月31日まで）

町出 夏樹（2024年6月1日から）

日吉行事企画委員会（HAPP）委員長

石井 明

日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

寺沢 和洋

3 組織構成員

2024年4月1日～2025年3月31日

所員：191名(2025年3月31日現在)

所長：片山杜秀(法)

副所長：高橋宣也(文)

鈴木亮子(経)

三原龍太郎(経)

寺沢和洋(医)

コーディネーター：

市川 崇(文)、徳永聡子(文)、西尾宇広(文)、

石井 明(経)、大出 敦(法)、石川 学(商)、

種村和史(商)、荒金直人(理)、高山 緑(理)、

見上公一(理)、高田眞吾(理)、

神武直彦(SDM 研究科)、

黒田修生(日吉キャンパス事務長・2024年10月31日まで)、

繁森 隆(日吉キャンパス事務長・2024年11月1日から)、

安川 力(教養セ事務長・2024年5月31日まで)

黒田修生(教養セ事務長・2024年10月31日まで)

佐藤 朋(教養セ事務長・2024年11月1日から)

広報担当：高橋宣也(文)

日吉行事企画委員会(HAPP)

委員長：石井 明(経)

委員：高橋宣也(文)、津田眞弓(経)、大出 敦(法)、

竹内美佳子(商)、小菅隼人(理)、小林拓也(理)

石手 靖(体研)、松本可愛(保セ)、

黒田修生(日吉キャンパス事務長・2024年10月31日まで)、

繁森 隆(日吉キャンパス事務長・2024年11月1日から)、

川田孝征(運営サ・2024年5月31日まで)、

町出夏樹(運営サ・2024年6月1日から)、

周藤有実(運営サ・2024年5月31日まで)、

中園裕子(運営サ・2024年6月1日から)、

中尾悠乃(学生部)、関口素子(日吉メディアセ)、

吉沢亜季子(日吉メディアセ)、

田邊まどか(教養セ・2024年10月31日まで)、

富田いづみ(教養セ・2024年11月1日から)

小佐野弾寄附講座「アカデミック・スキルズ」運営委員会

委員長：片山杜秀(法)

委員：高橋宣也(文)、鈴木亮子(経)、三原龍太郎(経)、

寺沢和洋(医)

「生命の教養学」企画委員会(2024年9月30日まで)

委員長：石川 学(商)

委員：西尾宇広(文)、有川智己(経)、谷口尚子(法)、

宮本万里(商)、川上了史(理)、三原龍太郎(経)

(株) コーエーテクモホールディングス寄附講座

「日吉学」運営委員会

委員長：片山杜秀(法)

委員：高橋宣也(文)、鈴木亮子(経)、三原龍太郎(経)、

寺沢和洋(医)、大出 敦(法)

「日吉学」企画委員会

委員長：大出 敦(法)

委員：高橋宣也(文)、安藤広道(文)、片山杜秀(法)、

阿久澤武史(塾高)、杵島正洋(塾高)、

都倉武之(福澤研究セ)

(株) コーエーテクモホールディングス寄附講座

「ゲーム学」運営委員会

委員長：片山杜秀(法)

委員：高橋宣也(文)、鈴木亮子(経)、三原龍太郎(経)、

寺沢和洋(医)、見上公一(理)

「ゲーム学」企画委員会

委員長：見上公一(理)

委員：三原龍太郎(経)、山下一夫(理)

(株) アカツキ寄附講座「エンターテインメントビジネス論」運営委員会

委員長：片山杜秀(法)

委員：高橋宣也(文)、鈴木亮子(経)、三原龍太郎(経)、

寺沢和洋(医)

「エンターテインメントビジネス論」企画委員会

委員長：三原龍太郎(経)

委員：吉川龍生(経)、山下一夫(理)

SMBCグループ寄附講座「金融リテラシー入門」企画委員会

委員長：片山杜秀(法)

委員：寺沢和洋(医)

日吉キャンパス公開講座運営委員会

委員長：寺沢和洋（医）

委員：高橋宣也（文）、有川智己（経）、石井 明（経）、
酒井規史（商）、小菅隼人（理）、沼尾 恵（理）、
神武直彦（SDM 研究科）、村松 憲（体研）、
黒田修生（日吉キャンパス事務長・2024年10月31日まで）
繁森 隆（日吉キャンパス事務長・2024年11月1日から）

庄内セミナー実行委員会

委員長：鈴木亮子（経）

委員：高橋宣也（文）、糟谷大河（経）、片山杜秀（法）、
小菅隼人（理）、鳥海奈都子（塾高）、
古川晴彦（塾高）

教養研究センター事務局

安川 力（事務長・2024年5月31日まで）、
黒田修生（事務長・2024年10月31日まで）、
佐藤 朋（事務長・2024年11月1日から）、
田邊まどか（2024年10月31日まで）、
池本晶子、富田いづみ、鈴木知子

4 2024年度の主な活動記録

Date		Events
4	2日	教養研究センター設置科目ガイダンス
	13日	【学会・ワークショップ等開催支援】シンポジウム「エイジングと文学」(“Ageing and Literature” Symposium)
	14日	【HAPP】日吉陸上競技場リニューアル記念 Enjoy Sports Day
	15日～7月26日	「学び場」プロジェクト 春学期活動
	17日	【情報の教養学】第1回：高橋直大「今だからこそ学ぶプログラミングとアルゴリズム」
	24日	【情報の教養学】第2回：福井健策「人はなぜ、それを未来に残すのか～デジタルアーカイブの夢と、権利、法」
	25日	【学会・ワークショップ等開催支援】「The Colour Revolution in Victorian Literature and Art ヴィクトリア朝文学・芸術の色彩革命」
	26日	読書会 晴読雨読⑥「アイデアの系譜学『アラマタの編集遊戯、エピソードの発掘』」 若澤佑典
	30日 30日	第1回所長・副所長会議 第1回コーディネート・オフィス会議
5	8日	第1回運営委員会
	8日、14日	「学び場」プロジェクト 学習相談 新生活応援座談会～新生活の有意義な過ごし方を学習相談員がレクチャー！
	11日	【HAPP】祭祀遺跡から古代の出雲、杵築大社の成立を考える―神と社の考古学―
	13日	みなさん mirai プロジェクト 公開シンポジウム①南三陸発！慶應の森からひもとく生物多様性
	15日	【HAPP】笠井淑子ポスト舞踏公演『未完成』
	15日、24日	【HAPP】ライブラリーコンサート2024 春
	25日	基盤研究 文理接続プロジェクト第1回 ゲスト講演1「人工知能と想像力の拡張：他者の知能から想像力の知能へ」 大澤博隆
	25日～26日	【学会・ワークショップ等開催支援】日本ラテンアメリカ学会 第45回定期大会
	27日 28日	第2回所長・副所長会議 みなさん mirai プロジェクト 公開シンポジウム②今、地震がおきたら？―キャンパスで考える防災― 【HAPP】今、地震がおきたら？―キャンパスで考える防災―（みなさん mirai プロジェクト）
6	17日	第2回コーディネート・オフィス会議
	19日	【情報の教養学】第3回：大黒岳彦「情報工学から想像学へ：ヒューマンエージェントインタラクションから物語応用までの系譜」
		読書会 晴読雨読⑦「アイデアの系譜学『分解と発酵の思考術：バラバラが生む日常の閃き』」 若澤佑典
	27日	【学会・ワークショップ等開催支援】講演会&WS「キャンパスにえがく夢：第5校舎跡地の未来」
	29日 30日	【学会・ワークショップ等開催支援】一般社団法人日本人形玩具学会総大会 【HAPP】古楽アカデミー・室内アンサンブル演奏会《バロック後期のドイツ室内楽作品》
7	5日	読書会 晴読雨読⑧スペシャル対談企画 片山所長×若澤佑典
	6日	基盤研究 文理接続プロジェクト第2回 ゲスト講演2「AI研究における人工アブローチ」 杉浦孔明
	10日	【情報の教養学】第4回：伊藤公平「AI時代の高等教育」
	21日～26日	【学会・ワークショップ等開催支援】Development of Iwasawa theory
	22日 23日	第3回所長・副所長会議 基盤研究 教養研究講演会 no.10「宗教の中国化」政策：文化的レトリックと統治戦略 汲舘 (Ji Zhe、ジー・ジャー)
8		【創造力とコミュニティ研究会】共に暮らす～ベットと私たち～
	2日	基盤研究 文理接続プロジェクト第3回 ゲスト講演3「生命科学・化学にみられる多様な階層の人工細胞」 藤原慶 /午後 ワークショップ1「人工」をテーマとする論考の計画発表
	6日	第3回コーディネート・オフィス会議
	7日	読書会 晴読雨読⑨「アイデアの系譜学『かたち学の構想：建築デザインから生命現象まで』」 若澤佑典
	8日 27日	みなさん mirai プロジェクト 事前学習会「カードゲーム 2030 SDGs」ワークショップ 【創造力とコミュニティ研究会】共に暮らす その2 鳥が期待する人との暮らし方～インコの心から紐解く～
9	29日～9月1日	庄内セミナー ※荒天のため中止
	3日	読書会 晴読雨読⑩「アイデアの系譜学『舞台上で踊る思考：大学キャンパスと演劇文化』」 若澤佑典
	5日	第2回運営委員会
	7日～8日	【学会・ワークショップ等開催支援】フランス教育学会 第42回大会
	11日～13日	みなさん mirai プロジェクト 南三陸合宿
	24日	【創造力とコミュニティ研究会】植物が彩る暮らし 植物の力と染色
	27日	第5回所長・副所長会議

	27 日	【HAPP】教養の一貫教育 吉増剛造×高橋世織×マリリア「詩と音楽の交差するところ 4」
	28 日	基盤研究 文理連接プロジェクト第4回 ワークショップ2 中間発表1 【学会・ワークショップ等開催支援】第25回英詩研究会
10	5 日、26 日、11 月 2 日、16 日、30 日 14 日～2025 年 1 月 24 日	日吉キャンパス公開講座 「学び場」プロジェクト 秋学期活動
	16 日	【情報の教養学】第5回：大澤博隆「情報工学から想像学へ：ヒューマンエージェントインタラクションから物語応用までの系譜」
	21 日	第6回所長・副所長会議
	22 日	【HAPP】古楽トークコンサート：スペイン中世音楽の楽しみ アルフォンソ 10 世賢王『聖母マリアの古謡集』
	27 日	【学会・ワークショップ等開催支援】スペイン史学会第45回大会及び総会
	28 日	第7回所長・副所長会議
	29 日	【創造力とコミュニティ研究会】社会課題をアートで解決するグローバルアートチーム LITTLE ARTISTS LEAGUE の全て
11	5 日 5 日～18 日 9 日	【創造力とコミュニティ研究会】ヨコハマ喫茶去 【HAPP】HAPPO STYROL INSTALLATION 【学会・ワークショップ等開催支援】慶應義塾大学体育研究所・公社）全国大学体育連合関東支部共催ワークショップ「ルーブリック作成と活用を考える ワークショップ & ディスカッション2」
	9 日～10 日 11 日	【学会・ワークショップ等開催支援】第19回日本応用老年学会大会 第4回コーディネート・オフィス会議 読書会 晴読雨読⑩「アイデアの系譜学『〇〇学』エトセトラ しっぱ学？きのこ学？』」 若澤佑典
	19 日	【HAPP】ライブラリーコンサート 2024 秋
	20 日	第3回運営委員会 高大連携プロジェクト 教養の一貫教育 vol.10 舞踏家・上杉満代による舞踏ワークショップ「呼吸を遊び 体を遊び 床を踏む！」
	29 日、12 月 2 日、6 日、9 日	実験授業 金融リテラシー入門
12	2 日	第8回所長・副所長会議
	5 日	第5回コーディネート・オフィス会議
	7 日	読書会 晴読雨読⑪「アイデアの系譜学『ビックリ！』のある思考 驚嘆と論理のビミョーな関係」若澤佑典
	9 日	第9回所長・副所長会議
	9 日	みなさん mirai プロジェクト 基調講演 & 学生活動報告「みんなの森の復権へ」
	13 日	【HAPP】メイクで探求する個性～自分を引き立たせる技と心 松下里沙子講演会
	14 日	基盤研究 文理連接プロジェクト第5回 ワークショップ3 中間発表2
1	18 日	【情報の教養学】第6回：北村崇師「なぜ AI は差別社会を作ってしまうのか？～問題と防止策について～」
	19 日	第4回運営委員会
	21 日	【HAPP】日吉音楽祭 2024 室内楽・ピアノマラソンコンサート
	8 日	コレギウム・ムジクム・オーケストラ演奏会
	11 日～12 日	【学会・ワークショップ等開催支援】International Symposium: Receptions of Greek and Roman Antiquity in Japan
	12 日	古楽アカデミー・オーケストラ・小合唱演奏会
2	13 日	【学会・ワークショップ等開催支援】Japanese Cinema: What Is It? 国際オンラインシンポジウム
	14 日	読書会 晴読雨読⑫「アイデアの系譜学『挨拶の交流圏 来往舎からの謹賀新年』若澤佑典
	20 日	第10回所長・副所長会議
	28 日	【創造力とコミュニティ研究会】循環する生と死を考える一巡る命に想いを寄せてー
	6 日	アカデミック・スキルズ プレゼンテーションコンペティション
	11 日	【創造力とコミュニティ研究会】ワークショップ 砂で描く、私の心
3	26 日	第6回コーディネート・オフィス会議
	1 日	基盤研究 文理連接プロジェクトプロジェクト第6回 ワークショップ4 最終発表
	2 日	【学会・ワークショップ等開催支援】第26回英詩研究会
	4 日	第5回運営委員会
	7 日～8 日	【学会・ワークショップ等開催支援】国際フレームネットワークワークショップ 2025
	14 日	<選書刊行記念企画>著者と読む教養研究センター選書 第4回「文芸共和国の歩き方 書棚を遊歩するためのキーワード集」若澤佑典
	26 日	実験授業支援 2024 年度理工学部総合教育セミナー II/GIC 科目 “Human Language Understanding and Generative AI: An Exploration of the Uses of AI in University Classes” (人間の言語理解と生成系 AI: 大学授業における AI 利用の可能性を探る)
	28 日	第11回所長・副所長会議

慶應義塾大学教養研究センター
2024年度 活動報告書

2025年8月31日発行
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 片山杜秀
〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1
TEL 045-566-1151
<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>
印刷・製本 サンパートナーズ(株)



慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts